

払田柵跡調査事務所年報 1976

払田柵跡

—第9・10次発掘調査概要—

秋田県教育委員会
払田柵跡調査事務所

序 文

松田柵跡昭和51年度の発掘調査は、第9次、第10次の発掘調査が行なわれ、築地
跡等の発見により、内郭線のおおよその姿と遺跡の性格を推測する手がかりが得ら
れるなど、大きな成果を収めることが出来ました。

ここにその概要を刊行するにあたって、日頃ご指導ご配慮を賜わっている顧問の
諸先生、文化庁の関係各位及び関係各機関に対し深甚なる感謝の意を申し述べます。

昭和52年3月31日

秋田県教育委員会

教育長 島 山 芳 郎

目 次

I はじめに.....	1
II 既往の調査.....	2
III 調査の計画.....	4
IV 第9次発掘調査.....	9
1 調査経過.....	9
2 発見遺構.....	11
3 出土遺物.....	18
4 考察.....	20
V 第10次発掘調査.....	23
1 調査経過.....	23
2 発見遺構.....	25
3 出土遺物.....	26
4 小結.....	37
VI 成果と課題.....	38
VII 調査成果の普及と関連活動.....	40

例　　言

1 この年報は、調査の速報を編集方針とし、全所員が発掘調査と整理作業にあたった。

調査概要の作成にあたり、次のとおり分担し、小松昭雄、千葉聖代が全面的に協力した。

第9次発掘調査　　島山　憲司

第10次発掘調査

1, 2, 4　　船木　義勝

3　　小玉　準

2 この年報と現地説明会資料の記述に相違がある場合は、本年報の記述を正確なものとする。

3 発掘調査および整理・概要作成にあたって顧問、文化庁、奈良国立文化財研究所、宮城県多賀城跡調査研究所、東北歴史資料館、秋田市秋田城跡発掘調査事務所、岩手県教育委員会、水沢市教育委員会、酒田市教育委員会、秋田県立博物館および下記の方々からご指導と助言をたまわったので、記して感謝の意を表したい。

仙北町　大山高八郎、後藤哲雄、後藤安司、竹村省吾　仙北町教育委員会　後藤千代松、
後藤定雄　仙北町公民館　後藤俊太郎、森本金龍　作業員　大河喜栄、渡木福太郎、原政
堆、越後谷慎一、熊谷良治、後藤清治、森川源之助、山田善之助、杉沢毅、山田アイ　東
海大学生、山崎文幸　山形米沢短大学生　茂木ふみ子　能代農高教諭　熊谷太郎　土地所
有者　後藤清治、高梨正進会第六支部（代表　大野清栄）

4 石質鑑定にあたって、秋田県立博物館加藤万太郎学芸主事よりご教示をたまわった。

5 写真的現像・焼増しについては、（有）藤岡商店　藤岡久助、後藤良司の両氏に大変なご
無理をお願いした。記して感謝したい。

6 土色の記載については、『標準土色帖』農林省農林水産技術会議事務局　監修、を参考に
した。

7 図版中、出土遺物は木筒を除き、土器は縮尺約2分の1、その他は3分の1である。

表 目 次

第1表 発掘調査計画表	4
第2表 発掘調査実績表	4
第3表 杯底部の器種別出現率	36
第4表 杯底部切り離し技法別出現率	36
第5表 土器総数に占める内黒土師器出現率	36
第6表 再調査のある土器数	36
第7表 造構別杯底部出土数	37
第8表 砥石・効鍛車・瓦・下駄・木簡出土数	37

挿 図 目 次

第1図 払田横跡発掘調査地域図 折込み	5
第2図 第9次発掘調査発見遺構図 折込み	7
第3図 S F75西壁断面図	10
第4図 S F75猪手の長さ模式図	11
第5図 S D76・S D77西壁断面図	12
第6図 S A83・S A82A・B・C実測図	13
第7図 S B80・S A78・S A84等実測図	15
第8図 S A84-3・S A85-3掘方断面図	16
第9図 S A78-2掘方断面図	16
第10図 S B87A・B・C等実測図	17
第11図 S B87A-1・87B-1掘方断面図	17
第12図 S B87B-2・87C-2掘方断面図	17
第13図 出土土器実測図	18
第14図 出土瓦実測図	19
第15図 S F75・S D77・S A83・S A82等実測図	21
第16図 第10次発掘調査発見遺構図	24
第17図 S K91実測図	25

第18図 S K97・98実測図	26
第19図 第Ⅱ層出土土器実測図	28
第20図 第Ⅲ層出土土器実測図	30
第21図 第Ⅳ層出土土器実測図	31
第22図 第Ⅴ層出土土器実測図	32
第23図 S X90出土土器実測図	33
第24図 S K91出土土器実測図	33
第25図 砂石・劫錐車・瓦・下駄実測図	34

図 版 目 次

図版1 払田構跡航空写真

図版2 (1)発掘地点の航空写真 (2)発掘地点の遠景

図版3 (1)第9次発掘調査全景 (2)同

図版4 S F75築地

図版5 (1)築地版塗状況 (2)同 (3)同

図版6 (1)S F75積手の違い 断面 (2)同 平面

図版7 (1)S D76・S D77溝状造構 (2)同

図版8 (1)S D77・76溝状造構断面 (2)S D77溝状造構柱痕跡

図版9 S A83・S A82角材列

図版10 (1)S A82A・B・C角材列 (2)S A82・B2角材列

図版11 (1)S A82A礎板状況 (2)同

図版12 (1)S A82A礎板状況 (2)角材列横断面

図版13 (1)S B87A・B・C (2)S B87B-2・C-2 (3)S B87A-2

図版14 (1)S B80・79, S A84・85 (2)同

図版15 (1)S A84-2, S A85-2 捩引方断面 (2)S F75, S A83・82の接点

図版16 (1)S F75, S A83・82の接点 (2)同 S D77内南壁

図版17 第9次発掘調査出土土器、瓦

図版18 第10次発掘調査全景

図版19 (1)S X93・S X94達景 (2)S K91・S L95達景

- 図版20 (1)S K91土壙 (2)S K91土壙断面
- 図版21 (1)S K97・98土壙 (2)S K97・98
- 図版22 (1)花瓶出土状況 (2)平瓦出土状況
- 図版23 (1)第12号木簡出土状況 (2)S K98内第14分木簡出土状況
- 図版24 第10次発掘調査第Ⅱ層出土土器
- 図版25 第10次発掘調査第Ⅲ層出土土器
- 図版26 第10次発掘調査第Ⅲ・Ⅳ層出土土器
- 図版27 第10次発掘調査第Ⅳ層・S X90出土土器
- 図版28 第10次発掘調査 S K91出土土器・砾石・劫鍔車
- 図版29 第10次発掘調査出土瓦・下駄・木簡

I は じ め に

昭和49年、現地に「秋田県払田柵跡調査事務所」を開設して早くも3年の歳月が流れました。この間、諸々の問題をはらみながらも、基本的には開発計画・現状変更等に対応すると同時に、遺跡の性格把握を主眼として調査を進めてまいりました。

昭和51年度は第1次5か年計画の第3年次目にあたり、第9、10次発掘調査を実施し、その結果、堂々たる築地跡や多量の土器の検出等を見、払田柵跡における内郭線の在り方、土器の編年等について、多くの興味ある事実が判明しました。とくに、築地と角材列が連続し両者が併用されて内郭を画した時期があり、内郭北門同様に内郭線が造り替えられたことなどはこれまでになかった知見であります。

この年報は、これら発掘調査の成果の概要をまとめたものですが、これが学術研究上並びに遺跡保存の一助になれば幸いです。

文末ではありますが、払田柵跡の発掘調査については、文化庁記念物課、奈良国立文化財研究所、顧問の秋田大学教授新野直吉、宮城県多賀城跡調査研究所長氏家和典の両先生のご指導を心から感謝申し上げるとともに、地元仙北町、同町教育委員会、千畠村および同村教育委員会、土地所有者、作業員の各位からは一方ならぬご協力とご援助を賜わりましたことに対して、厚くお礼申し上げます。

昭和52年3月31日

秋田県払田柵跡調査事務所長

高 橋 司

I 既往の調査

払田柵跡は、秋田県仙北郡仙北町大字払田・千畠村本堂城廻にある。遺跡は、雄物川の中流域に近い秋田県大仙市の東方約6km、横手盆地の北側、仙北平野のほぼ中央部に位置し、第3紀頃噴出岩の真山・長森の段丘を中心に、北側の島川・矢島川・南側の丸子川に囲まれた沖積地にある。

明治39年頃から始まった耕地整理の際に発見された埋木が、地元の後藤寅外氏・藤井東一氏の努力によって、歴史的遺産と理解され、遺跡解明の糸口が開かれたのである。昭和5年10月、文部省嘱託上田三平氏によって、東北古代城柵では最初の学術調査のメスが入れられ、短期間に、遺跡の輪郭を実証したことは、まさに驚異であった。この調査結果に基づき、昭和6年3月30日付国指定史跡となり、本格的な解明を将来に託したことは、今日においても記憶されてもよいだろう。

昭和48年度に入り、指定地を中心に「仙北地区新農村基盤総合整備パイロット事業」が実施されることになり、計画どおり実施されれば、遺跡は壊滅し、その痕跡さえとどめえないことは必至であった。このため、当教育委員会は、この重要な遺跡を保護するため基礎的な発掘調査を促進して、遺跡の実態を把握することとし、昭和49年度現地に地方機関を設け、本格的な発掘調査を開始した。調査を開始してから3年を経過し、第1次発掘調査の空白を埋めるよう新しい事実が毎年公表されると同時に、管理団体仙北町当局および地域の人々の深い理解にあざかり、開発計画は中途再検討の段階となっている。しかしながら、まだ多くの問題と未調整の課題をかかえており、今後北、関係者の理解と協力を仰ぐとともに、史跡保存のあり方が問われており、なお一層の努力が要求されている。

「払田柵跡発掘調査要項」の設置に基づき「第1次5か年計画」の基本計画が立案された。

1. 大規模調査に対応する基準測量の実施

2. 開発計画に対応しうる基礎調査の促進

- ① 内、外郭間の位置と構造、変遷の概要把握
- ② 内、外郭間の発掘調査の促進
- ③ 管理計画策定資料の収集

3. 現状変更届出に伴う緊急発掘調査の実施

4. 史跡保存のための基礎資料の作成

上記の基本計画に沿って、昭和49年度～50年度間、第2次～8次発掘調査が実施された。調査の概要については次のとおりである。

1. 昭和49年度は、基準測量調査として、指定地内にコンクリート柱35本を埋設し、「基準点成果簿」「基準点測量網」を作成した。昭和51年度においても、既設のつけかえのほか6本を新規埋設した。

2. 内郭線の調査は、第2次発掘調査として内郭北門跡、第3次発掘調査として築地状遺構を確認した。内郭北門跡は、八脚門の掘立柱建物で、新旧2時期あり、角材列も再建されていることがわかった。從来、内郭線は、北側にしか存在しないとされていたが、長森丘陵東・南側において築地状遺構が発見されたことから、長森丘陵を取り囲むように内郭線があるだろうという見通しがえられた。

3. 外郭線および外郭地区主要地域の調査は、第4～8次の発掘調査が行なわれた。このうち第4・8次は現状変更届出に対応した緊急調査であった。外郭線の調査は、第4次発掘調査として、北東部の一部を調査対象としたが、角材列を発見することができず、外郭線の位置について、新しく課題が提起された。第7次発掘調査は、外郭南門跡を発掘し、八脚門の掘立柱建物跡を再確認した。当地域の土壤(SK60)からは、「嘉祥二年正月十日」の年紀をもつ木簡が発掘され、出土土器とともに、絶対年代の決定ともいえる貴重な資料を発見したことは特記してよいだろう。

外郭地区主要地域の調査としては、第5次発掘調査として、真山西端部を行なったが、主要遺構の発見はなかった。第6次発掘調査は、外郭西門跡の東側を発掘し、竪穴住居跡を発見。一括遺物の出土とともに、今後の検討資料となっている。第8次発掘調査は、「仙北町民俗資料館」建設工事に伴う事前調査として実施したもので、主要遺構の発見はなかった。

以上第2次～第8次発掘調査の概要に根ざし、第1次5か年計画の基本計画に密着させながら本年度の事業計画が立案された。

■ 調査の計画

昭和51年度の発掘調査は「払田橋跡発掘調査要項」に基づく、第1次5ヶ年計画の第3年次にあたる。さいわい発掘調査費については、秋田県の要求額どおりの国庫補助金の内示（総経費800万円のうち、国庫補助額400万円）を得たので、次のような「昭和51年度払田橋跡発掘調査計画（案）」を立案した。

第1表 発掘調査計画表

第9次	内郭線北東地区	920m ²	5月～8月
第10次	外郭主要地区 (外郭南門跡北側地域)	400m ²	9月～12月
合計	2 地区	1320m ²	

しかしながら、第9次発掘調査地区内での予想外の遺構の重なりや、そのための精査の手間などに加え、例年ない天候不順等により、調査の進行には当初の予想より大幅な遅延が生じた。

昭和51年度の発掘調査の実績は以下のとおりである。

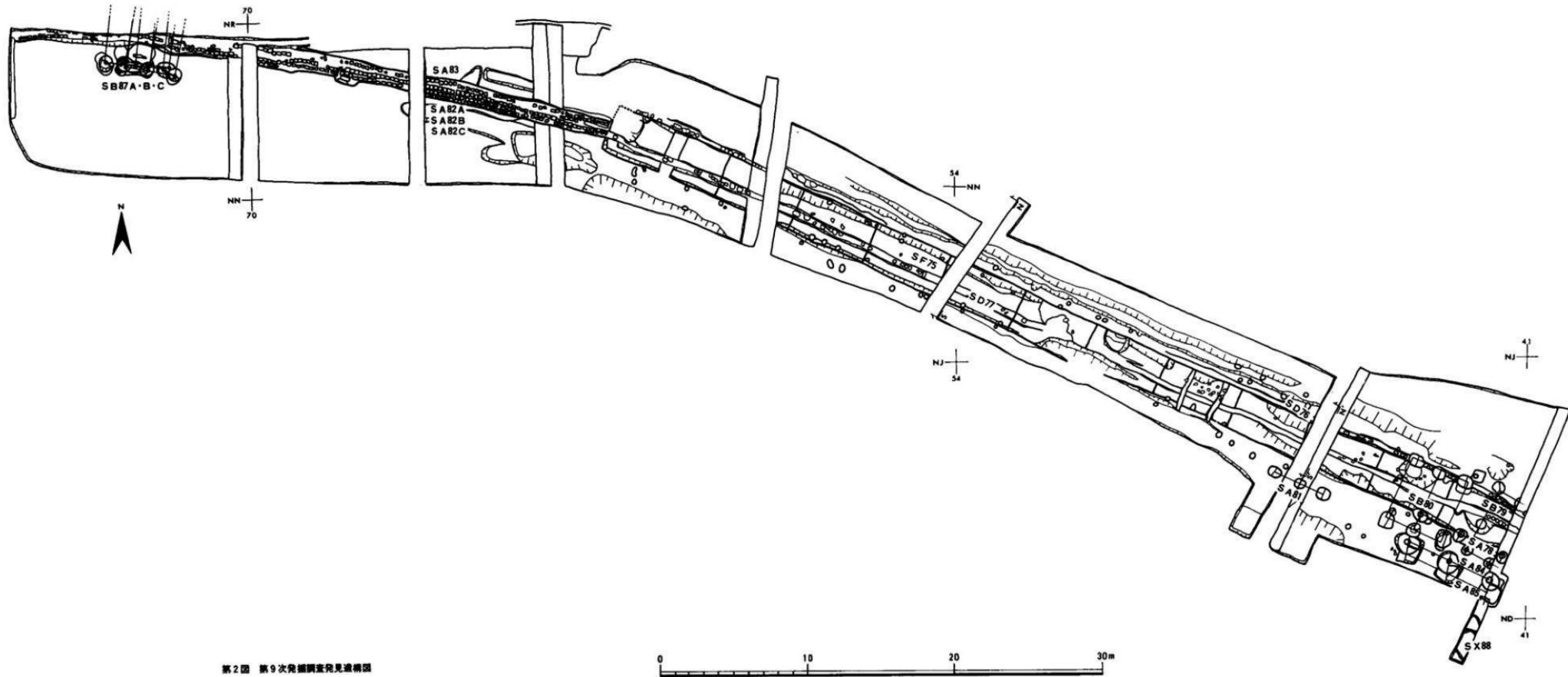
第2表 発掘調査実績表

第9次	内郭線北東地区	1000m ²	5月10日～10月26日
第10次	外郭南門跡北側地域	400m ²	10月27日～12月11日
合計	2 地区	1400m ²	

なお、年間を通して出土遺物、資料等の整理をおこなった。



第1図 桐田横跡先掘調査地図



第2図 第9次発掘調査発見遺構図

IV 第9次発掘調査

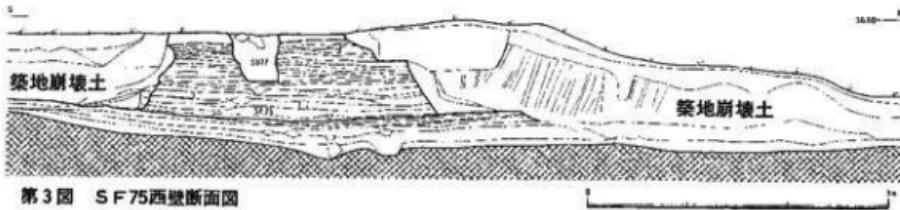
1 調査経過

第9次発掘調査は仙北町大字払田字長森23の1番地のうち、約920m²を対象とした。当地域は払田構跡の北東隅やや内側で、想定内郭線長森丘陵の北東端裾部にあたり、外郭東門へは直線にして約200mの地点である。本調査は、①昭和49年度第3次発掘調査で発見された築地状遺構の性格と構造を究明すること。②昭和5年の調査により推定された内郭線角材列の本調査区内での位置と、その構造を明らかにすること。③築地状遺構と角材列との関連を明らかにすること。などを目的として計画された。

昭和51年5月10日～19日まで、測量原点（No.17）から調査区に測量原点の移動、器材の搬入、表土の下払い、発掘区の設定等を行った。5月20日、調査区東端部の表土の除去を開始し、同日、合わせて、調査区東端で断面観察のための南北トレンチを入れた。それによると、第3次発掘調査検出の築地状遺構は基底幅2.7m前後の築地であることがわかった。（これをS F 75築地跡とした。）また、築地のはば中央と北側端には、築地積土を切った溝状遺構の存在することが明らかになった。この観察結果をもとに同21日から西方に表土除去を開始した。表土はうすく、10～20cmで築地本体、あるいは崩壊土にあたる。しかし、調査前まで当地域には樹齢40～50年の杉林があったため、その根が築地本体、その他の遺構に深く入りこんでおり、それらを掘り上げると遺構を破壊する恐れが生じた。このため根を遺構上面で一本一本切っていくことにしたが、積土に含まれた角礫等も多く作業は難渋を極めた。5月31日までに調査区東端より西に直線で約13m S F 75築地跡を検出し、同時に溝状遺構もS F 75のはば中央（S D77）と北側端（S D76）を走ることがわかった。また、S F 75本体上面で、S F 75軸線に対し直角に左右の土色が全く異なる箇所があり、積み手の違いであると推測された。6月2日にS F 75の断面観察のため幅1mのトレンチを入れた。その結果、S F 75築地跡は基底幅約3mで、その中軸線中央と北側端にS D77、S D76のあることが明確になった。6月14日までに調査区東端より約30m西までS F 75築地跡の上面等を検出し、築地崩壊土を切るS A78、S B79、80、81を検出した。S F 75築地は約30m直線で、その上面観察より5～6mくらいの間隔で積み手の違いが見られた。6月16日よりは、一時調査区の中間にとぼし、調査区西端部に移動した。雑草等の下刈りをし、推定角材列線のボーリング探査を行ったところ、調査区西端より約

40m 前後の地点で角材にはあたらなくなり、同地点が築地と角材列の接点部分と思われた。同17日より表土剥ぎを行い、接点部分では S D77溝状造構の延長と思われる掘り方が表土の下に見え、ボーリング探査によって、その中に角材が存在することを確認した。同26日には、この接点より東側に断面観察のために幅1mのトレンチを入れ、築地、溝状造構のあることを確かめ、S D77とS D76にそれぞれ柱アタリと思われる跡を検出した。その後、残っていた築地部分の検出につとめ、7月13日まで全長約70mにわたるS F75築地のおおよその姿を見た。なおこの間、7月5日、6日に第6回の顧問会議が開かれ、新野、氏家両顧問より適切な指示を得た。この後築地寄柱等の検出につとめたが、位置や規則性に乏しいものばかりで、明確にその姿を捉えることはできなかった。またS D76、77等の掘り下げも行ったが、上面及びその途中では柱アタリ等はつかまえられず、結局は底面まで下げるのみでわからなかった。これらの作業と並行して調査区西部において、角材列の部分的な精査を行ったが、掘り方の見えるレベルでは角材のアタリを捉えることができなかった。角材列の掘り方は二条あり、北側の掘り方は南側の掘り方により切られていた。南側をS A82、北側をS A83とした。7月30日より本格的に角材列の検出につとめ、8月9日までに完掘したところ、S A83はS A82よりも古く、S A82は部分的に三列になることがわかった。この間、西端部においてS B87の掘り方を確認した。その後、調査区全域にわたり残された作業を行い、S B80はS D77をまたぐ東西棟二間一間の掘立柱建物跡であること、S D76は部分的になくなるが、その西端部では柱アタリが存在すること等を確認した。8月12、13日には、築地と角材列の接点部分を掘り下げ、S F75はそれ以上西にはのびず、S A83はS F75の中軸線に一致すること、S A82A・BはS D77に連続すること等を確認した。その後、写真撮影のため全域の清掃を行い、8月17・18日の両日写真撮影を行った。その後、8月24、25日の第7回顧問会議により、細部にわたる指示を得た。同28日には、現地説明会を行い、30、31日の両日、東北古代城柵官衙遺跡発掘担当者会議を現地で行った。

9月2日より実測造り方を設定し、9月6日から実測を開始した。しかしこれと並行し、土層断面、溝状造構の掘り下げ等の精査や補足調査などを調査区全体にわたって行ったため、調



第3図 SF75西壁断面図

査期間が予想以上に延長されることとなった。埋め戻しに入ったのは10月22日で器材の運搬等も含め、調査が全て終了したのは10月27日であった。



2 発見遺構

本調査で検出した遺構は築地跡 1、溝状遺構 2、角材列 4、掘立柱建物跡 5、柱列跡 4、その他である。(第2図)

築地 (第3、4図、図版4、5、6の1)

S F75 調査区東端より西北西に約68mほど直線で発見された築地跡である。一部ゴミ捨て場や道路面に利用されているが、その遺存状態は良好であった。築地構築方法は、まず(黄褐色地山土の上の) 黒色土を幅10~13mにわたり地ならしをし、その中央に幅6~7m、厚さ0.2~0.3mの版築による盛土整地層を造る基礎地盤を行い、その上のほぼ中央に基底幅約3m(約10尺)の築地本体を築くものである。本体積土は黄色粘土、暗褐色粘土、黒色土等を丹念に互層に版築したものである。積土中にはこぶし大から寺頭大の角礫をかなり意識的に使用している。

築地本体全长にわたり、積土の土色の違いが帶状に觀察され、築地軸線に対し縦方向の積手の違いがわかる。その1つの単位は5.6m前後のものが多く第4図のごとくである(単位m)。なお、積手の違いは高さにおいても見られ、2か所の断面觀察によれば、盛土整地層上面より0.7~0.8mの高さで仕事の工程を違えている。(第3・5図)

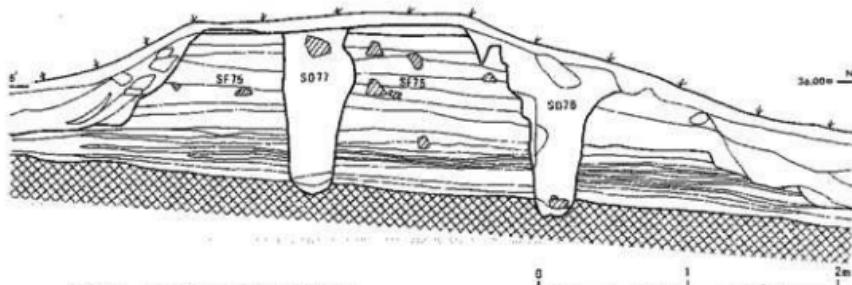
築地本体両側端部に寄柱と思われる柱穴が検出されているが、間隔が不規則であり、部分的にしか存在しない。寄柱については不明である。また、築地本体両外側約0.4~0.7mに築地に並行して並ぶ浅い柱列跡が部分的にある。径30~40cmの円または梢円形がほとんどで、間隔にはばらつきがあるが、約2.2~3.0mである。盛土整地層上面より掘り込んでいるので、本体を築成する際の工事用足場穴かと思われる。

調査区東端部、築地本体より4~5m南に土取り穴と思われる掘り込みがあった(S X88)。後述するS A85柱掘方はこの土取り穴を埋めた後に掘り込んだものである。

第4図

S F75 積み手の長さ
模式図(単位 cm)

溝状遺構



第5図 SD76, SD77西壁断面図

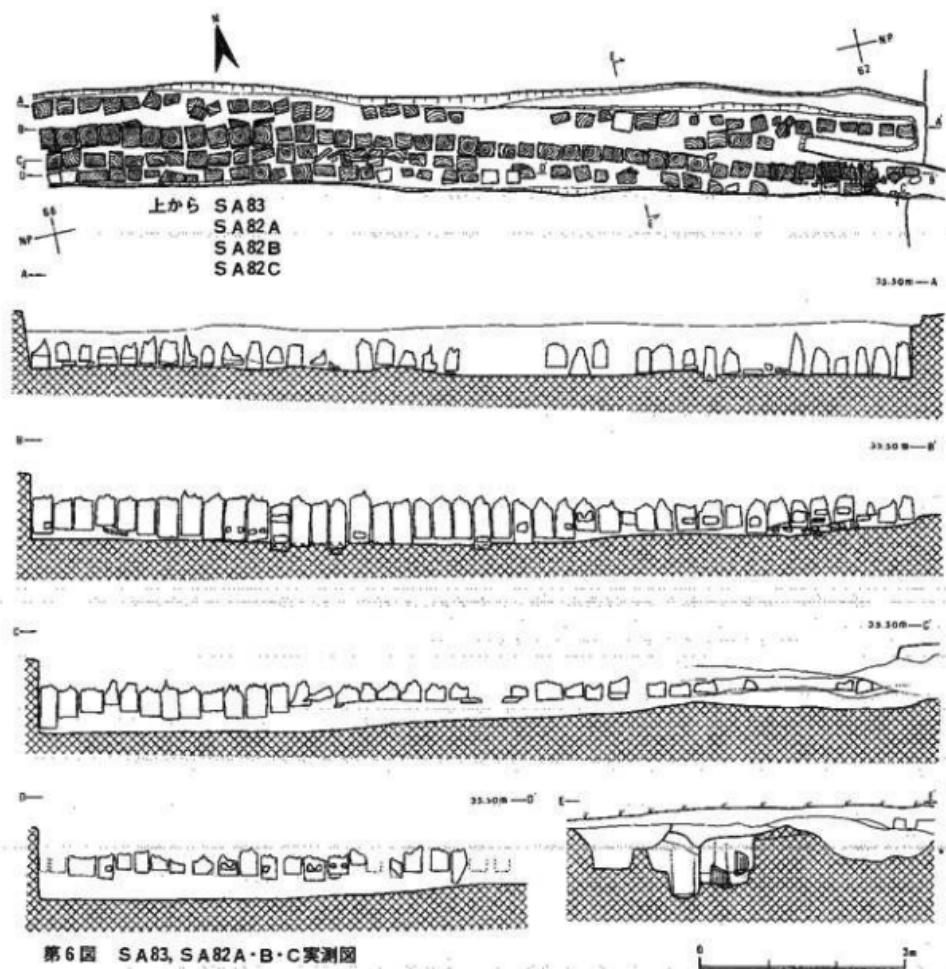
S F75本体中央と北(外)側端にS F75中軸線と並行する二条の溝状造構がある。

SD77 S F75本体積土を切り、幅約0.5m、深さ約0.3~1.1m、断面深いU字形を呈する溝状造構で、S F75本体のほぼ中央を東西に走り、築地西端部ではそのまま、後述する角材列S A 82B・Cの掘り方に連続するものである。(第15図、図版15の2, 16)。掘方底面は丸い鍋底状を呈するが、粘質でしまりのある黄褐色土と黒色土の混土が上面を平らにして堆積している。埋土は築地崩廻土に似た褐色の細かい土であるが、中に築地積土にも用いている角砾を含んでいる。また、掘方底面で柱アタリに似た土色の違い、あるいは硬さの違いが見られる所があり、角材ないし丸太材が立っていた可能性がある。埋土中より、赤褐色を呈し、底部回転糸切り離して再調整のない土師器の破片が多数出土している。

SD76 部分的にとぎれるが、S F75本体外(北)側端を一部切るようにして掘り込まれた溝状造構で、築地崩廻土を切っている。幅約0.4m、深さ0.4m~0.8m、断面深いU字形をなすが、底面にはSD77と同様の埋土があり平らでかたい。部分的に柱アタリに似た土色の違いがある。角材か丸太材が入っていたものと考えられる。埋土はやわらかい赤褐色土であるが、西に行くほど硬くなる。SD76がどのような性格の造構であるかは不明である。

角材列 (第6図、図版9, 10, 11, 12の1)

S F75築地西端より西北西、内郭北門方向に連なる角材列は部分的に3~4列あり、今次は全長約42m検出した。角材列は大きく二期間に分けられ、北からS A83, S A82A, S A82B, S A82Cとする。角材はいずれも長方形、方形で、手斧でていねいに面取りし、挽穴のあるものが大部分である。(挽穴の有無についてはほんの一部しか調べていない。調べたかぎりでは大部分であった)。角材の材質はS A82Cを除き全て杉である。S A82Cは杉材の他に一部広葉樹が使われている。これらの角材列は直線的ではなく、南側にわずかづつ屈折する。



第6図 SA83, SA82A・B・C実測図

SA83 古い角材列で、新しい角材列（SA82）の掘方によって切られており不明な点も多いが、幅約0.5m～0.8m、深さ0.7～0.9mの布掘りの中に角材を立て並べたものである。角材は抜き取られたとして一部を欠くが、一边27cm×23cm前後のものが多く、主に長辺を軸線（東

西)に合わせている。角材と角材の間隔は1~2cmないし数cmである。角材は掘方底面まで入っているものが多く、現長30~60cmあり、その下には部分的に小さな礎板が敷かれている。

SA82A・B・C SA83の掘方南側を切って、SA83の南(内)側に造られた角材列である。幅0.8~0.9m、深さ0.8~1.0mの布掘りの中に2~3列(SA82CはSF75築地と角材列の接点より西に5.7m~14.2mの範囲8.5mしか存在しない)の角材がほとんどすき間なく立ち並んでいる。これが時期をかえた仕業か同時かは明確にとらえ得なかつた。

SA82A 4列の角材列中、角材の大きさ、埋設された深さ、材と材との間隔等において最もていねいな仕事のものである。角材は一边27cm×27cm前後のものと22cm×23cm前後のものが多く、材と材との間隔は0.5~3cmとせまい。現存する材一本の長さは60cm前後のものがほとんどであるが、中には80cm近いものもある。材底面はほぼ平らでその下には軸線に対し横に小さな礎板が角礎とともに敷かれている。(同版II、12の1)。SF75築地との接点においては、SD77溝状遺構の中にこの角材列の東端部が検出された。

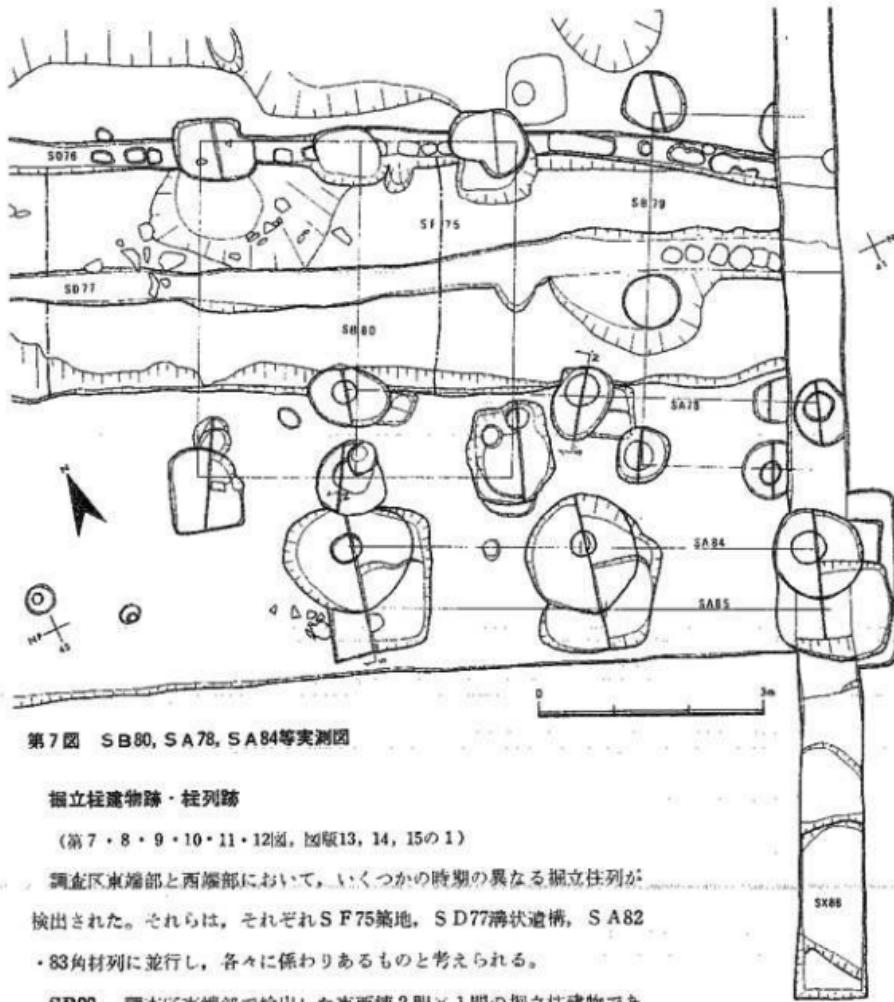
SA82B SA82Aの南(内)側にある角材列で、SF75に近づくにつれSA82Aに接近し、約5~6cmの間隔しかなくなる。SA82Aと同様にSF75との接点部分ではSD77の中より検出された。遺存する材は東側ほど短くなり、20cm前後である。材底面は掘方底面より高く約25~30cm上にある。材の下には礎板を有し、SA82Aの礎板と同じ礎板の上に材がある箇所もある。角材列の屈折する場所、角度もSA82Aに似る。

SA82C 今調査区内では、わずかに約8.5mしか存在しない角材列で、4列のうち最も南(内)側にあり、掘方南壁に接している。角材には大小かなりのばらつきがあり、他の3列と異なり杉材の他に広葉樹を一部用いている。材の下には礎板を有するものも一部あるが、その底面は掘方底面より30~40cmも上にある。遺存する材は長さ約30cm前後のものが多く、中には腐朽してアタリだけを残すものもある。

なお、角材には丸太一本加工、二つ割加工、四つ割加工があり、各角材列の各々の数量は以下のごとくである。

	調べた本数	一本加工	二つ割	四つ割
SA83	33本	5本 (15)	20本 (61)	8本 (24)
SA82A	41	34 (83)	7 (17)	
SA82B	30	5 (17)	19 (63)	6 (20)
SA82C	18	4 (22)	14 (78)	

()内は%を表わす。



第7図 SB80, SA78, SA84等実測図

掘立柱建物跡・柱列跡

(第7・8・9・10・11・12図、図版13, 14, 15の1)

調査区東端部と西端部において、いくつかの時期の異なる掘立柱列が検出された。それらは、それぞれSF75築地、SD77溝状造構、SA82・83角材列に並行し、各々に係わりあるものと考えられる。

SB80 調査区東端部で検出した東西棟2間×1間の掘立柱建物である。柱間寸法は桁行4.5m(15尺)、梁行2.1m+2.1m(7尺+7尺)である。柱掘方はややふぞろいで、1m×0.8m前後のものが多く、深さは0.3~0.5mと浅い。柱アタリは検出できなかった。柱掘方はSF75築地の崩壊土を切っており、SD76溝状造構より新しく、SD77をまたぐ。

SB79 SB80の東側に検出された4本の柱列で、桁行1間(4.5m)梁行1間(1.8m)以上の掘立柱建物と考えられる。掘方は築地崩壊土を切っており浅く、2つの柱アタリは径約

30cmである。

SA84 S F 75本体南側端より約2m離れ、築地中軸線に並行して東西に3本(3.1m+3.1m)並ぶ柱列である。柱掘方は築地削壊土除去後に検出され、径1.2m~1.5mの略円形、深さ1.25m前後で、掘方やや北寄り底にわずかに柱根を残す柱アタリがある。柱の太さは径約30cmである。(第8図、図版15の1)。埋土はしまりのある褐色、黄色、黒色土の混

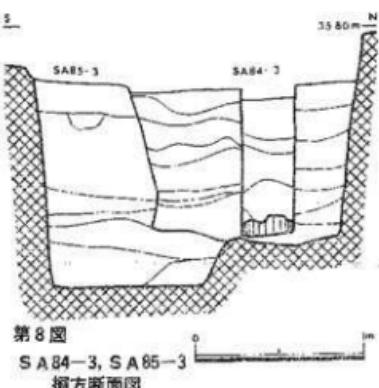
土で、掘方下方より小さな木片等に混じり木簡の破片が出土した。柱掘方がS A85掘方を切っており、S A85柱列があまり時間を経ずて建て替えたものと考えられる。北側にこれに対応する柱穴ではなく、南側にも6m以内には存在しない。

SA85 S A84掘方より北側をほど切られているが、S A84と同様の柱列跡で柱間は約3m等間と考えられる。柱掘方は一边約1.3m×1.4mの略方形で深さは1m~1.3mほどである。柱アタリはない。埋土はかなりしまっており、下部に木片等を含む。

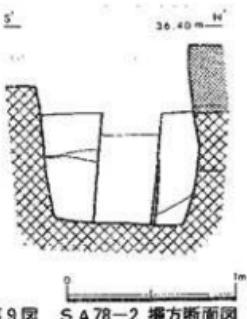
SA78 S F 75本体南側端を一部切って掘られた3本の柱列である。柱掘方は築地削壊土を切っており径約1m×0.7mの梢円形、深さ0.8mである。掘方やや北寄りに明確な柱アタリが残り径30cm~40cmを計る。(第9図)。柱間は心心で3.15m+3.15mで、東にのびる可能性もあるが調査範囲内で南北には対応する柱はなかった。

SA81 調査区東端より約13m西、S F 75南(内)側にある3本の柱列である。築地の軸線に並行し、築地南側端より約1.5m離れている。柱掘方は0.8m×0.9mの隅丸の長方形で浅い。柱アタリはなく、築地削壊土を切っている。柱間は心心で、1.8m×1.8mである。

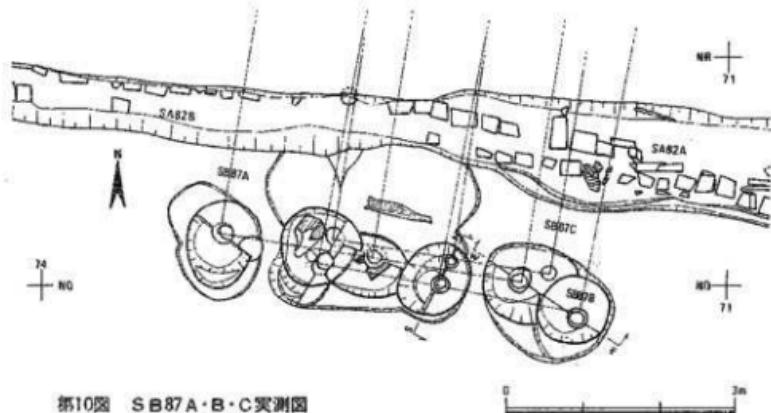
SB87A・B・C 調査区西端部で角材列より約1.5m~2m南側に検出された掘立柱建物跡である。S A82 A・Bに並行し、東西に3本づつ柱が並ぶ。(第10図、図版13の1)。角材列の反対(北)側は発掘できなかつたが、ボーリング探査によれば柱根が存在するので、いずれも角材列をまたぐ東西棟2間1間の掘立柱建物と考えられる。柱掘方にはそれぞれ切り合があり、古い順



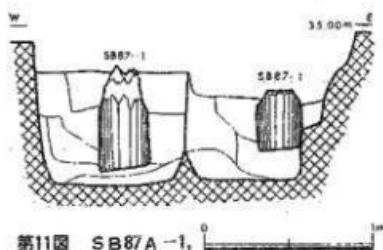
第8図
S A84-3, S A85-3
掘方断面図



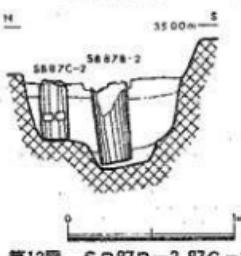
第9図 S A78-2 掘方断面図



第10図 SB87A・B・C実測図



第11図 SB87A-1, 87B-1 横断面図



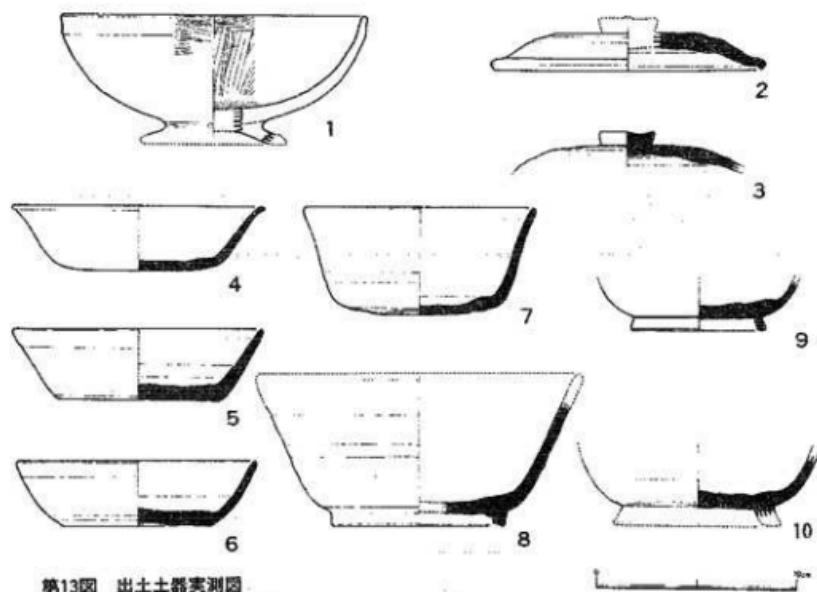
第12図 SB87B-2, 87C-2 横断面図

にA・B・Cとする。BとCの切り合い関係は捉え得なかったが、柱根の遺存状態から判断した。

SB87Aは約 $0.9\text{m} \times 1.15\text{m}$ の略横円形柱掘方のほぼ中央に約 30cm の柱を立てるもので、柱根は手斧仕上げのきれいな面取りのある丸柱であった。(第11図、図版13の3)。柱間は心心で $1.95\text{m} + 1.95\text{m}$ 等間である。

SB87Bは一部SB87A柱掘方を切っており、SB87Aより新しい。径約 1m 、深さ 0.8m の柱掘方の中に径 $21\sim 27\text{cm}$ の面取りのある丸柱の柱根が残っている。柱根の頭はやや北に傾いている。柱間は心心で東より $1.75\text{m} + 1.6\text{m}$ である。(第11、12図、図版13の2)

SB87Cは柱掘方を明確にとらえられなかつた。柱根は $15\text{cm} \sim 20\text{cm}$ で面取りのある丸柱であった。柱間は $11.3 + 1.6\text{m}$ である。(第12図、図版13の2)



第13図 出土土器実測図

3 出 土 遺 物 (第13・14図、図版17)

本調査では、全般に遺物の出土量が少ない。土師器、須恵器、瓦の他は見るべきものがない。

土師器 図示できるものは高台付杯1点である。他に内外面赤褐色で回転条切底の再調整のないものが、小さな破片でSD77やSA82掘方内、SB87B・C掘方内などから出土している。第13図の1は内面と外面口縁部黒色の高台付杯である。全体の約半分が残存するのみであるが、口径15.2cm、器高約6.5cmを計る。内面はユビ等で横方向にナデたあと、口縁部を斜めないし横にヘラミガキし、最後に底面中央から放射状のヘラミガキを施している。外面には口縁部から体部中位まで横あるいは斜めのヘラミガキ痕がある。その下は摩滅が激しくミガキの有無等は不明である。口縁頂部には3~4条のヘラミガキ痕があり、やや平らな面となっている。底部には外に弱々しくふんばるような高台を有するが、ほぼ杯部を形造った後に付したと思われる。全体として土器内面は非常になめらかで凹凸はない。これに比し外面は不規則な浅い凹凸があり、クロ不使用のものと考えられる。(図版17の1)

須恵器 いずれも破片であるが図示できるものが蓋2、杯4、高台付杯1、壺底部2である。第13図2は、SA84-2掘方内出土のもので、天井外面に墨書きがあるが判読できない。外

面、体部と天井部の接点に右方向の回転ヘラケズリが施してある。全面青灰色を呈し焼成は良好である。3の天井外側全面に右回転ヘラケズリが施されている。4はS A85-3 堀方底部出土の杯で、底部は回転ヘラ切り離しである。底部から体部下半にかけては丸味をもって立ち上がる。再調整はない。全体の約3/6しか現存しない。(図版17-4)。5は築地崩壊土中より出土のもので、内外面ともに肌色がかかった灰白色でやわらかく、ナマヤケの感じである。底部切離しは、右回転のヘラ切りである。再調整はない。6は体部約3/6しか残存しない。底部は左回転のヘラ切離しで、体部との境にヘラケズリ痕が1条ある。図示できなかったが、底部だけの破片でこの土器にかなり類似し、左回転ヘラ切離しのものが1点出土している。4~6ともに口径1に対する底径比は0.64前後である。7は深い杯で内外面のロクロ目は顯著でない。口径11.4cm、器高5.4cm、底径7.2cmを計る。底部は回転のヘラ切り離しのあと倒立させ回転ヘラケズリを施し、そのあとナデを行なって、底部端に2条の沈線を描いている。沈線と沈線の間隔は6mmで、本来この部分に高台を付するためのアタリであったと考えられる。8は体部約3/6の破片で、外面に顯著なロクロ目を残す。高台は付高台でほぼ垂直に立ち、高台内端部が上がる。底部切離しは不明だが回転のヘラ切りと思われる。7.8ともに内外面灰白色で焼成はやや良である。9、10は小形の盃と思われる。9はうすい青灰色で、細かい砂粒を多く含む。10は暗青灰色で焼成は非常に

良く、かたい。10の

底部切離しは右回転

ヘラ切りで、ケズ

リは施していない。

9、10ともに高台を

付する際に、アタリ

をつけたようだ(沈

線)、10は高台を付

したあとそのまま

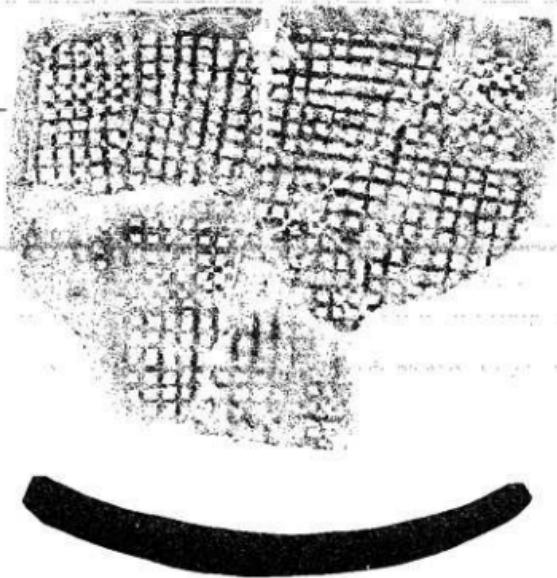
をヘラ状の工具で軽

くおさえている。

瓦 (第14図、

図版17-11)

調査区東端部、堀



第14図 出土瓦拓影図

立柱建物跡、柱列跡周辺より平瓦片が15点出土し、接合の結果2個体となった。

図示したものは幅27cm、厚さ2.3cmで、表面は正格子タタキ目、裏面には布目痕がある。表面の側縁と側面は手持ちのヘラケズリを施し、それぞれのタタキ目、布目痕をケズリ消している。

4 考 察

(1) 築地、溝状造構、角材列、掘立柱建物、柱列について

昭和49年度第3次発掘調査において、長森丘陵東・南裾には築地状造構の存在することが確認され、從来「内柵」と呼ばれていた内郭線角材列と、この築地状造構の連・不連続が懸案となっていた。今回第9次発掘調査の結果では第3次発掘調査にいいう築地状造構(注1)は、本体基底幅約3m(約10尺)の堂々たる築地であることが判明し、角材列と直接に接し、連続することがわかった。

築地は一部にかなりの削平を受けていたが概して残りが良い。このためその構築方法が、部分的にではあるが観察できた。すなわち、まず黒色土を築地を造ろうとする輪線にそって、幅10~13mにわたり地ならしをし、その上に幅6~7m、厚さ約30cmの版築による盛土整地層を築き、そのほぼ中央部に築地本体を構成するものである。この際注目されるのは、築地本体構成の場合の積手の違いである。検出した築地全長で積手の違いがあり、築地軸線に対して直角に長さ5.2m~5.6m、厚さ0.7m~0.8m積むことを1回の工程としていた。また、この1つの単位と単位の間には幅2~3cmの土色の異ったやわらかい部分のあることもある。(図版6-1, 2)。そして、築地の崩壊は地震にでもよるものでなかろうかと想起されるような箇所がいくつかあった、すなわち、築地崩壊土の中に積土がそのままの形で残っている部分があった。第3図に示した断面図中、築地北側崩壊土の中には、積土がちょうど90°だけ回転してころげ落ちたと思われる継の版築がそのまま観察できた。この部分を仮に吹っている本体の高さにそのままのせるとすると、築地本体の高さは最底3.3m以上を想定することができる。また、築地の前後からは調査区東端部を除き瓦の出土はなく、築地は瓦葺きではなかったものと考えられる。

築地崩壊後、残った本体の高まりを利用して溝状造構が存在する(SD77)。その幅、深さ、前後の施設等との関連では、上壁、空堀的なものとはとうてい考えることは出来ない。その西端部では掘方の中に角材列が存在すること、他の部分では柱アタリに似た跡の見えることを合わせ考へるならば、この溝状造構の中には、角材あるいは丸太材が立っていたものと思われる。

角材列は主に3列、部分的に4列検出され、新旧関係のあることがわかった。築地、溝状造構との関連で見るならば、最も古い角材列S A83はその東端部においてS F75築地西端部中軸線に接続し、両者は連続する。S A82AとS A82Bと

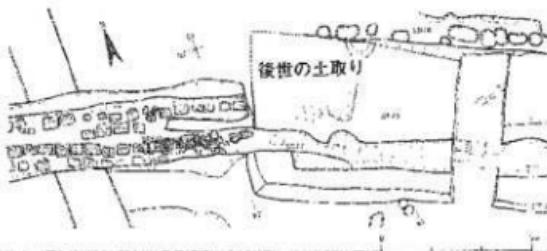
・に新旧関係があるか否かは不明であるが、両者の東端部においては両者は溝状造構、S D77西端部掘方の中より検出された。従って、角材列S A82A・Bは溝状造構S D77と連続する。(第15図)

また、上述した築地、溝状造構、角材列にそれぞれ伴うものと考えられる掘立柱建物あるいは掘立柱列がある。それらの位置、構造、および規模等から推測すれば、これまで岩手県矢巾町鏡丹城跡、宮城県多賀城跡、秋田市秋田城跡等(注2)で検出されている構跡あるいは、それに類似するものであると考えられる。しかし、それらの諸遺跡ではいずれも外郭線に取り付く施設であるが弘田城跡では、内郭線のそれである。(注3)

(2) 内郭線について

弘田城跡内・外郭線の角材列(いわゆる「網列」)について上田三平氏は、昭和5年の国営調査(第1次発掘調査)結果にもとづき、角材が地上約10尺~12尺つき出ていたと想定した。(注4)しかしその後、東北の各城跡で同様の造構の検出例を増すにつれ、そのような角材列に対し最近は、上田氏とはやや違った見解が出されるようになってきている。(注5)

今回の第9次調査ではそれらを勘案して、発掘調査を進めた。結論からいうと、弘田城跡における内郭線は、基本的には築地を意図したものであろうと考えられる。しかるに、角材列および角材列と他の造構とのあり方は、角材列が単に築地の基礎的な仕業等でしかないとは考えにくい点が多い。すなわち、角材が地上に確實につき出ていたという証拠は捉え得なかつたが角材列の前後には掘立柱建物跡の他は、積土その他の造構は検出されなかつたし、後世にそれらが除去されたとは考え難い状況にあった。さらに、角材列の掘り方および角材の底面は当時の地表面より約0.8~1mほど下にあり、少なくとも地上3~4mの角材が十分に立ち得たものと推測される。また、古い角材列と築地とはお互いその中軸線で連続し、新しい角材列も崩壊した築地の上に掘られた溝状造構に連続する。これら角材列のあり方、角材列と築地、溝状



第15図 S F75, S D77, S A83, S A82等実測図

遺構との関連、角材列や溝状遺構をまたぐ掘立柱建物跡、内郭北門への角材列の取り付け方、立地条件等を合わせ考えるに、角材列は地上に頭を出し立っていたものであり（注6）、払田柵跡における内郭線は少くとも2期考えられることになる。

新旧の内郭線のあり方は以下のとくである。

①古い内郭線 = 長森丘陵の南・東・西裾には築地を築成し、低湿地（北=現水田）には角材列を構築する。第9次発掘調査出土土器等からして9C前半に近いものと思われる。

②新しい内郭線 = 古い内郭線とほとんど位置をかえずに造り替えられた。低湿地は古い時期と同様に角材列で、以前築地であったところは崩壊した築地の跡に溝を掘り角材（あるいは丸太材？）を立てる。

なお、このことにより想定される内郭線の大きさは、約東西770m×南北320mの長方形となる。

また各遺構間の関連は以下のとおりである。

	築地	溝状遺構	角材列	掘立柱建物・柱列	内郭北門
旧	S F75		S A83	S A85	S B02
	S F01		S A03	S A84	
	S F02			S B87A	
新		S D77	S A82A・B S A01・02 S A82C	S B87B S B80 S B79 S B87C S A78	S B01

注1 『払田柵跡調査事務所年報1974』秋田県払田柵跡調査事務所1975年。

注2 板橋源、佐々木博康、『陸奥国徳丹城』岩手県文化財調査報告第20集、1972年。『多賀城跡一昭和47年度発掘調査概報』宮城県多賀城跡調査研究所1973年。『秋田城跡一昭和50年度秋田城跡発掘調査概報』秋田市教育委員会1976年。

注3 注2の『多賀城跡一昭和47年度発掘調査概報』の中の内郭築地内側の3~4列の柱列に類似性を見る。

注4 上田三平、『払田柵跡』史蹟精查報告第3 1938年。

注5 桑原道郎：「東北地方における城柵の外郭線の構造特にいわゆる櫓木について」研究紀要直、宮城県多賀城跡調査研究所1976年。

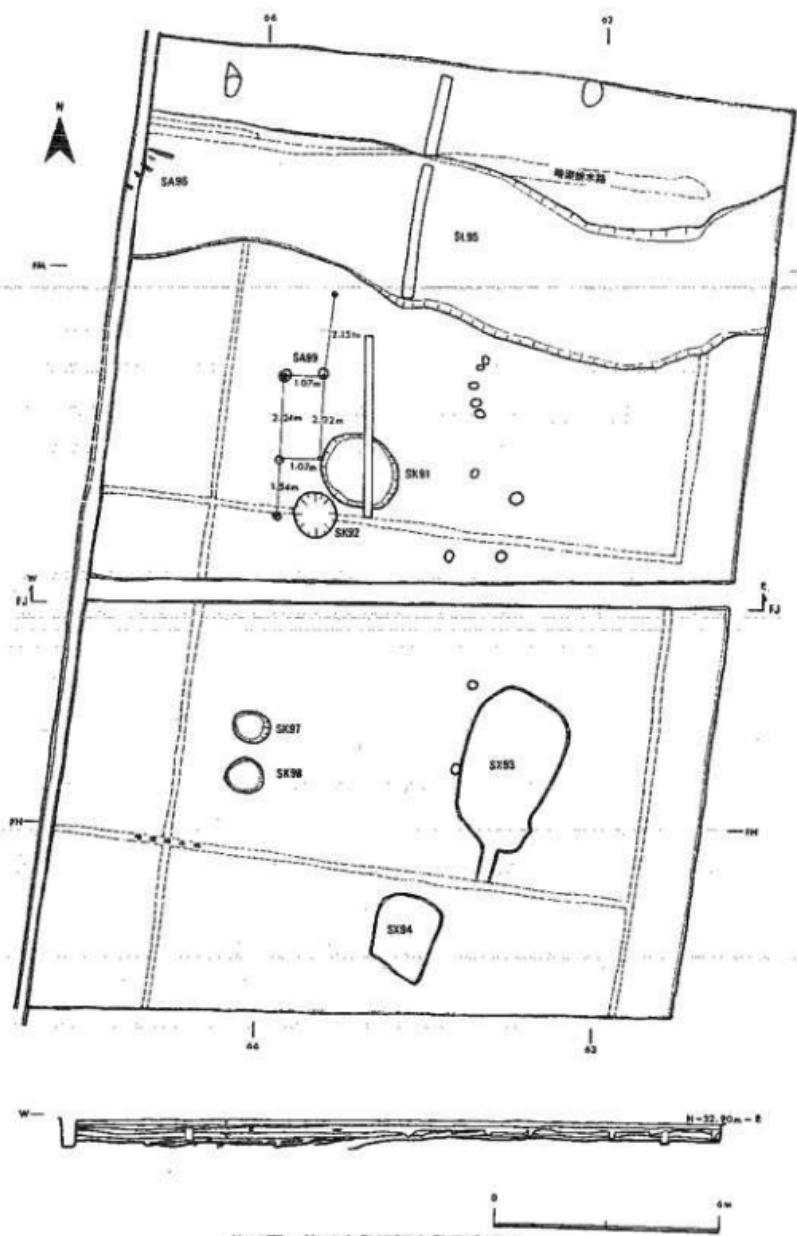
注6 注1と同じ。この中で角材列の地上における高さをそれほど高くないものと想定したが第9次調査結果からは本文のように想定される。

V 第10次発掘調査

1 調査経過

第10次発掘調査は仙北町払田字仲谷地62-1番地内、調査面積400㎡(121坪)を発掘した。当地域は昨年度の第7次発掘調査で残された同地内北側の未調査地である。本調査は①外郭南門と内郭間の外部内主要地域発掘調査の--環として、②木簡が発見された土壙(S K60)北側の遺構の有無等について確認することを目的とした。

今季は冷害と収穫期の長雨により、調査区の船刈が3週間余も遅れ、早い冬将軍の到来が予想された。10月27、28日に基準点の移動、グリッドの設定をおこない、調査区西側に排水路を掘ることにした。11月4日からF Fライン北側1mを残し、南から北へ表土(第1層・耕作上・剥ぎ)を開始した。8日から黒褐色土層(第Ⅲ層)、10日から黒色・黒褐色土層(第Ⅳ層)と急ピッチで作業を進め、F L65・66から下駄(半分)を発見し接合できた。11月12日初雪。S K91・92が確認され、S K91には炭化物と共に土器が多量に入っているのがわかった。F I 66・67、F J 66・67付近からは土器、石器が集中しているため精査したが、遺構は確認できなかつた。遺物はS X90として取り上げた。15日から黒褐色土層(第Ⅲ層)に入り、16日には第12号木簡、S X93・94を発見。昨年度の土壙(S K60・64)と同様な遺構、あるいは住居跡とも考えられた。調査区北側を東西に走る河道(S L95)があることがわかり、ナラ、ヤナギなどの古木や木葉などが埋もれていた。この時点で、第Ⅲ・Ⅳ層と第Ⅲ層との間に土器の種類と出土量とに著しい差があることに気づいた。第Ⅲ・Ⅳ層には、土師器が80~90%、須恵器10~20%であるのに、第Ⅲ層では土師器が55%、須恵器が35%である。第Ⅲ層の出土量は第Ⅲ・Ⅳ層より70~80%も少なかつた。11月24日から暗緑灰粘質土層(第Ⅳ層)を掘り始める。この第Ⅳ層中を10~20cm掘り始めるとき黒褐色炭化物(2~3cm)を敷いたようなところが、F K64・65、F L64・65・66の範囲だけに認められた。26日にはF J 65から石製紡錘車が出土した。第Ⅳ層出土土器は第Ⅲ層の2倍近くで、須恵器が50%、土師器が40%と両者の比率が逆転する。27日から天候不順が続き、調査区は泥沼化が一段と激しくなり、除雪と排水に明け暮れ、晴れ間を見て写真撮影をおこなつた。12月3日から杭打ち、造り方設定、翌4日から実測を開始した。12月9日から補足調査に入り、F H65・66・67、F I 66・67付近の第Ⅳ層遺物包含層を掘り下げたところ、F I 66から叩き満巻文のある平瓦、F I 67からは須恵器の花瓶が立ったまま発見され、周囲を精査したが掘方等の遺構はつかめなかつた。翌10日は、降りしきる雪の中、S K97・98を検出し、S K97からは第14号木簡が出土した。今冬は降雪量が多く、これ以上発掘



第16図 第10次発掘調査発見遺構図

調査を続けることは不可能となり、12月11日に荷物運搬・テント撤去を行ない、第10次発掘調査を終了した。

この間、11月29・30日第8回顧問会議を開き、顧問の新野・氏家両先生に現場視察をお願いし、調査指導と助言を賜わった。本会議では、昭和52年度以降の長期計画および今後の発掘調査体制についてもご指導をいただいた。

2 発見遺構

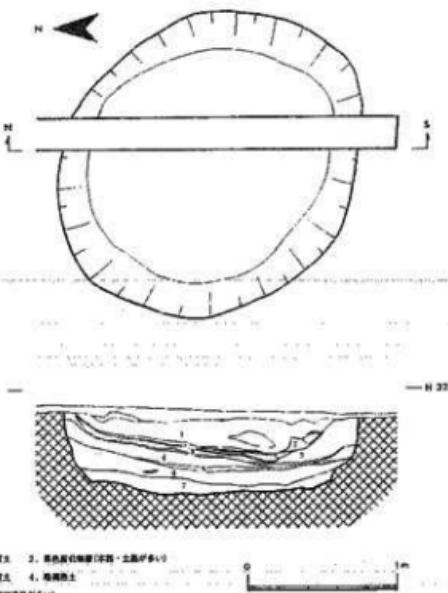
本調査で検出した遺構は、土壇4・河道1・杭列2・その他2である。(第16図)

層序について簡単に述べておきたい。FJライン北壁断面の観察から、第I層耕作土、第II層黒褐色土(10YR 3/4)、第III層黒色・黒褐色土(7.5YR ~ 10YR 3/4)、第IV層黒褐色土(2.5Y 3/4)、第V層暗緑灰粘質土(10G Y 3/4)にわけられる。

以下、主要遺構について述べる。

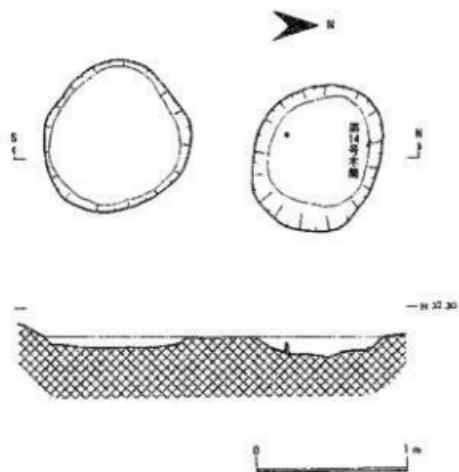
SK91土壤 本土墳は2度にわたって使用されている。当初の規模は、直径 $2.5 \times 1.87\text{m}$ 、深さ 0.50m と長楕円形に近い。土壇内には、暗緑灰・暗オリーブ灰色の粘質土に、炭化物・クルミ・植物遺体などが入っていた。次の時期は、当初のほぼ中央部に直径 $1.90 \times 1.70\text{m}$ 、深さ 0.3m の規模で、梢円形である。土壇底面には、黑色炭化物と木片・植物遺体・土器が $2 \sim 3\text{cm}$ 、その上に、暗青灰色粘質土がのっている。土壇内出土土器は、多量の土師器と小量の須恵器・内黒土師器がみられた。SK91は第II'層期の土壇である。(第17図)

SK92土壤 SK91の南側に隣接して、同時に発見された。土壇の規模は直径 $1.15 \times 1.06\text{m}$ 、深さ 0.12m の円形に近い。土壇内には黑色炭化物・焼けた木片数点と暗青灰色粘質土が入っていた。土壇内出土土器は少量の土師器、内黒土師器・須恵器がみられた。SK92は第II'層期の土壇である。



第17図 SK91実測図

1. 耕作土
2. 黒褐色土(木片・土器が多い)
3. 黑褐色土
4. 黒褐色土
5. 黑褐色土(木片・土器が多い)
6. 暗緑灰粘質土(木片・土器が多い)
7. 黑褐色土



第18図 SK97(右)・98(左)実測図

SK97土壙 土壙の規模は直径 $1.05 \times 0.95\text{m}$ 、深さ 0.14m でほぼ円形に近い。中央よりやや南東よりに、径 5cm 程の丸太棒が立っていた。丸太棒の頂部は腐朽しているため、どの位土壙肩から出ていたかはわからぬ。土壙内からは、管形木器と木筒(第14号)が北側の底面に密着して発見された。土器は土師器・内黒土師器・須恵器がみられた。SK97は第Ⅳ層期の土壙である。(第18図)

SK98土壙 上塙の規模は直

径 $1.00 \times 0.96\text{m}$ 、深さ 0.06m で、ほぼ円形に近い。SK97に比較すると底面が浅く、埋土は暗青灰色粘質土で、遺物は土師器・須恵器が数点みられた。SK98は第Ⅴ層期の土壙である。(第18図)

SL95河道 この河道は調査区北側にあり、河道の肩は北側は暗緑灰砂層に、南側は暗緑灰粘質土上面にある。河幅は約 3.7m 。肩から河底面までは東で 0.84m 、西端では 0.80m で、河底は西から東に向ってゆるやかな低い傾斜をもち、わずかに蛇行していた。河道内には、チラ・ヤナギと思われる埋木や、削り屑と思われる木片や植物遺体がみられた。

SA96杭列 SL95の西端に削材杭3本・丸太杭2本の杭列がみられた。杭は頂部が北西方向から南東方向に斜めに打ち込まれており、頂部は河道の肩からわずかに突出しているものがある。又、杭の底部は河底部にまで達していた。これら杭列を観察してみると、位置が不規則で、傾斜角度の違いも大きく、杭の太さも不揃いである。上流からの水流に抵抗するような斜方向にあるのだが、どのような機能を果たしたものか、解明することはできなかった。

SA99杭列 現状で確認できた杭は6地点で、相対する杭の「あたり」付近を精査したが確認できなかつた。天候不順の悪条件下での作業のため、見失っている可能性もある。便宜上SA99杭列の名称を東側の北から南へ1, 2, 3、西側の北から南へ4, 5, 6とする。杭1・2・4は丸太杭、3・6は削材杭で、4はあたりが確認できた。杭間の間隔は、1・2・3間は 2.15m 、 2.22m 、4・5・6間は 2.24m 、 1.54m で、2と4、3と5間は 1.07m と同一で

あつた。この長さから、2・3と4・5、2・4と3・5間はほぼ等しいから相関関係にあると考えたいし、1・6も位置からみて、関連する同一遺構としておきたいが、1の位置が列方向からわずかに東偏していることは不自然である。

S A99の機能は、当初 S A99周辺に何らかの建物跡があるのではないかと精査したが、天候の悪条件も重なって確認できなかった。又、S A99はS L95に近い位置にあり、これに付随する施設かとも思われるが、肯定する素材がない。S A99北側の延長線上、S L95内にも関連する遺構はなかった。S A99は第Ⅲ層期の遺構か、第Ⅳ層期の遺構か明確につかめなかつた。

SX93その他 遺構の規模は $4.10 \times 2.55m$ 、深さ $0.05m$ の不整長方形で、南側のわずか東よりに幅 $0.44m$ 、長さ $0.90m$ 、深さ $0.05m$ の溝が付く。埋土は暗褐色土で出土遺物はなかつた。

SX94その他 遺構の規模は $2.10 \times 1.60m$ 、深さ $0.05m$ の不整長方形である。埋土は暗褐色土で出土遺物はなかつた。SX93、94は、第Ⅲ層期の遺構である。

3 出 土 遺 物

(1) 層序別出土土器

土器は各層から出土しているが、第Ⅰ層は耕作による搅乱層で、小破片が若干出土しているだけであるので省略する。

① 第Ⅱ層出土土器 (第19図、図版24)

土器が圧倒的に多く出土した。

土器

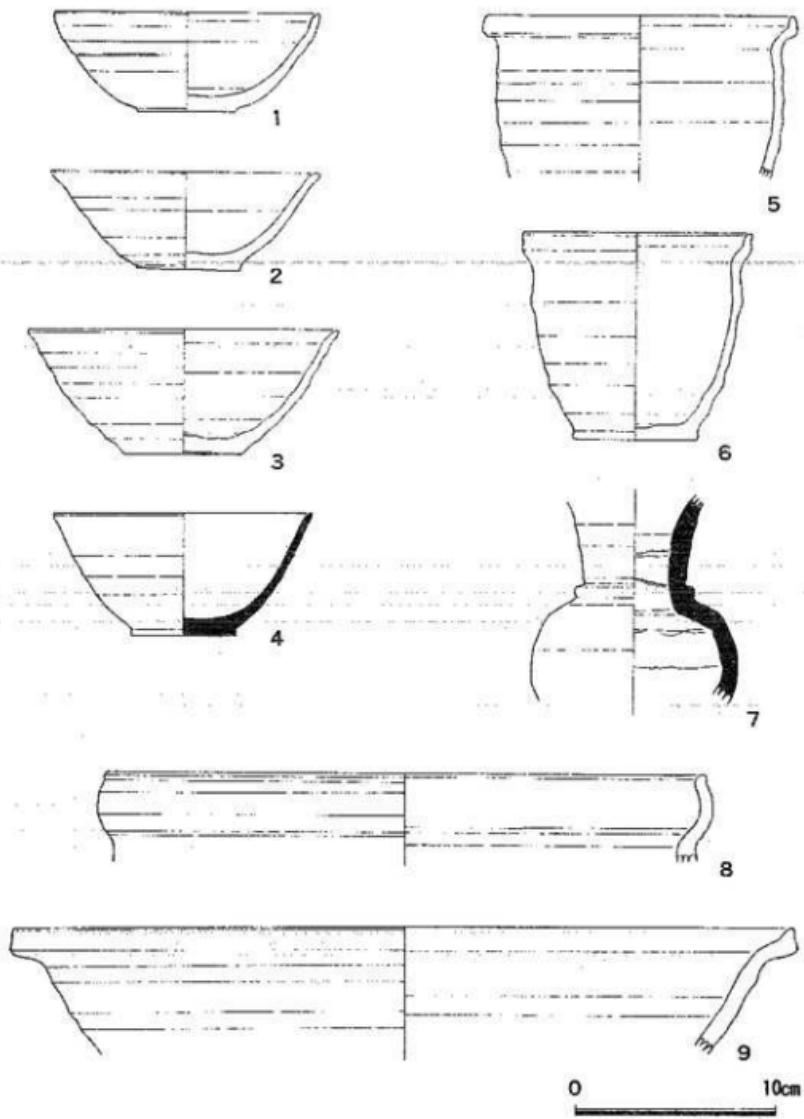
杯 (1~3) 浅黄橙色ないしにぶい橙色を呈し、砂粒が混入しているが焼成は良好、回転糸切りで底径の口径比はいずれも0.38である。(1)はロクロ調整後の開部が浅い沈線状をなしており、(2)は内外両面に黒斑が見られ、(3)は底部内面の中心部に黒褐色の物質が付着している。

甕 (5・6・8) (5)(6)は小形で煤が付着している。(6)は口径 $11.5cm$ 、器高 $10.4cm$ 、底径 $6.2cm$ を測る。(8)は口縁部が内済し、口唇部がわずかに立ち上がるものである。

鍋 (9) 内面はにぶい橙色、外面は黒褐色を呈し、煤が付着する。焼成は良好でロクロ調節されている。口径は $39cm$ 程と推定される。

須恵器

杯 (4) 灰色を呈し、胎土に大きめの砂が多いが、焼成は良好である。回転糸切りで底径



第19図 第II層出土土器実測図

の口径比は0.41である。

長頸壺 (7) 球形にふくらんだ体部から頸部が外反しながら立ち上がる。体部と頸部の境には粘土紐張り付けによる突帯が設けられている。胎土は細かいが、器肌はザラザラしており内面に粘土紐巻き上げ痕が明顯に残る。

② 第Ⅱ層出土土器 (第20図、図版25)

Ⅱ層同様、土師器が多く出土した。

土師器

杯 (10・11) ⑩は浅黄橙色を呈し、体部がいくぶん外側にふくらみながら立ち上がり口縁部がやや外反し、末端では内側に少し折れる。回転糸切りで、底径の口径比は0.39である。⑪は浅黄橙色を呈し、胎土に砂粒が多いが焼成は良好で堅い。体部が外方にわずかにふくらんで立ち上がり、先ほそりの口縁部に至る。底径の口径比は、0.48である。

甕 (14~20) 小形鉢甕と大形 (16~20) にわけられる。甕の外面には調整時の工具によると思われる、浅い斜線が数段見られる。⑮はロクロ調整後、体部を持ちヘラケズリし、体部最大幅は22cm前後と思われる。⑯はロクロ調整後、外面に綫方向に刷毛調整し、口縁部をヨコナデしている。口唇部にはヘラによるおさえがあり、綫線を形成している。一般に砂粒の混入が多く、外面に煤が付着している。

須恵器

杯 (12・13) ⑬はにぶい黄橙色を呈する。胎土は微細で、焼成は良好で堅い。回転糸切り離して、底径の口径比は0.38である。⑭は灰白色を呈し、胎土は細かく、焼成良好である。回転糸切り離して、底径の口径比は0.49である。

③ 第Ⅲ層出土土器 (第21図、図版26)

出土数が少なく、図示し得るものは2点にすぎない。

土師器

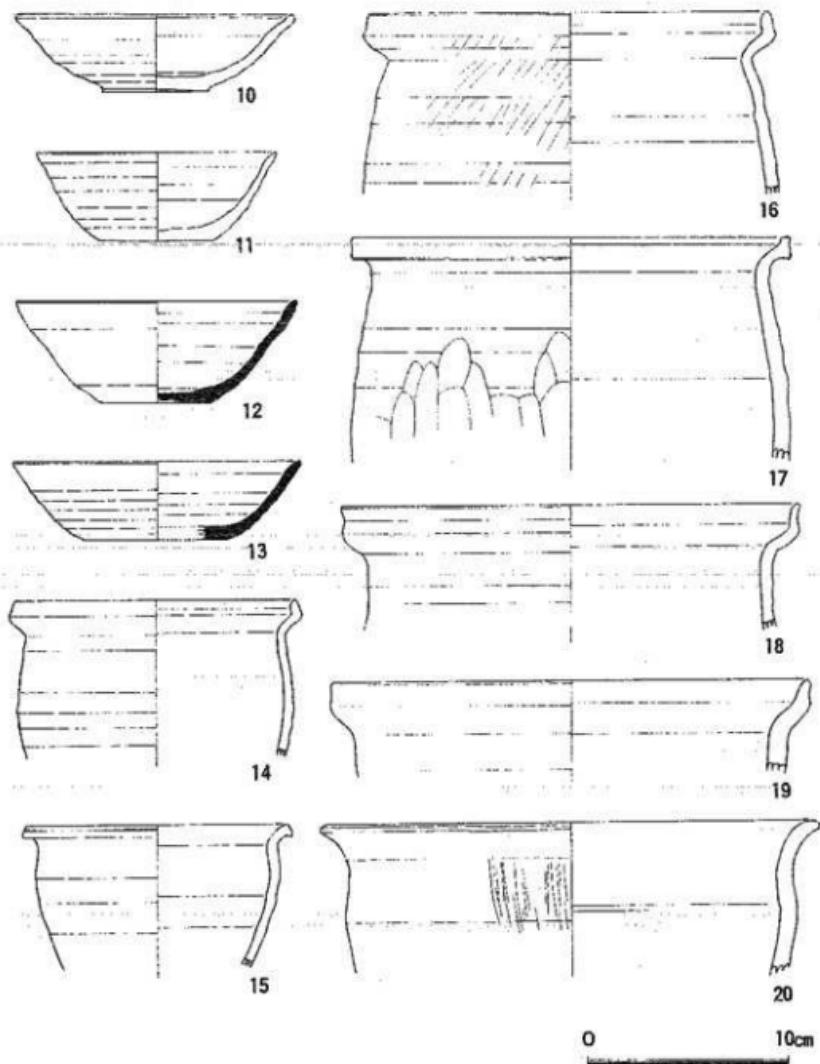
杯 ⑮ 淡黄色を呈し、胎土には細かい砂粒が多く、焼成はやや不良である。回転糸切り後の底面に、1本のヘラ描き刻線が見られる。底径の口径比は0.42である。

須恵器

杯 ⑯ 灰色を呈し、胎土は微細で、焼成も良好である。体部内面下半に墨が付着し、底面は磨滅しており、貌として転用されたらしい。底径は小さく、口径比0.31である。

④ 第Ⅳ層出土土器 (第22図、図版26・27)

土師器・内黒土師器・須恵器が出土している。



第20図 第II'層出土土器実測図

土師器

杯 (23~26) 例は内黒で、底部を欠くが体部には両面に横方向のヘラミガキがなされている。例は外面は淡黄橙色を呈し、内黒で、底部内面に不定方向のヘラミガキがなされている。回転糸切り後に高さ5mm程の高台を付し、台部内側をナデている。例は淡橙色を呈し、胎土に砂が混入するが、焼成は良好で堅く、回転ヘラ切り離し後、体部下半と底面の半ばまで回転ヘラケズリをほどこす。高さ2.7cm、底径の口径比0.63である。例は口縁部が大きく外反するもので、にぶい橙色を呈し、焼成は良好で堅く、砂粒の混入も少ない。底径の口径比は0.35である。

壺 (33~35) 口縁部が外傾して先端がわずかに内傾し、先細りになるもの33、口底部に沈線のあるもの34、横方向に大きく外反し、先端の内面にふくらみを持つもの35などがある。ロクロ調整後、体部内面に刷毛調整がなされている。

須恵器

杯 (27・29・31) 初例は灰白色を呈し、回転ヘラ切り、底径の口径比はそれぞれ0.67、0.57である。例は灰色を呈し、胎土は極めて細かく、回転糸切りで、底径の口径比は0.47である。

高台杯 (30・32) 例は回転ヘラ切り後、高台を付し、底部周縁に回転ヘラケズリをほどこしている。例は高台から体部がいくぶん丸みをもって立ち上がり、器体の半ばで腰をなして屈折し、ゆるやかに外反しながら口縁部に至る。高台はほぼ直立する台部の先端が先ぼそりになりつつ外側へ張り出し、台部内端部がわずかに浮き上がりて棱を形成する。底部切り離しははっきりしない。

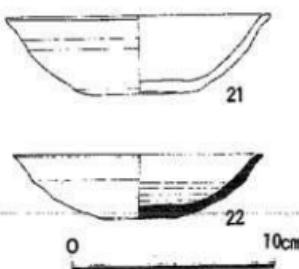
花瓶 壷 現高20.3cmを測る、緑灰色を呈し、底部より5cm程の箇所に粘土紐巻き上げ痕が見られる。内外両面にロクロ成形痕を残し、切り離しは回転糸切りである。

(2) 造構別出土土器

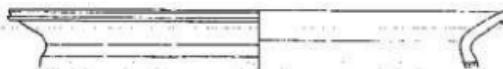
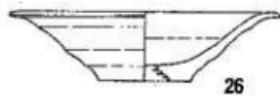
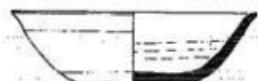
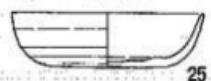
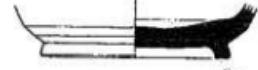
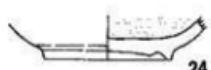
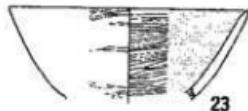
SX90出土土器 (第23図、図版27)

造構は確認されなかつたが、F I 66・67、F J 66・67付近から集中して発見されたものである。

土師器



第21図 第三層出土土器実測図



0 10cm

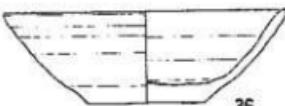
第22図 第Ⅳ層出土土器実測図

杯(36・37) 細は淡黄橙色を呈し、胎土・焼成ともに良好である。回転糸切りで、底径の口径比は0.41である。細は内面橙色、外面黒褐色を呈し、胎土に砂粒が混入するが、焼成は良好である。口縁部が外反しつつ先細りとなる。回転糸切りで、底径の口径比は0.37である。

甕(38) にぶい橙色を呈し、内反ぎみの体部から口縁部が屈折して外反する。外面は緑、内面は横方向に刷毛調整され、外面口縁部はヨコナデされる。刷毛目工具の幅は、その末端の痕跡から、2cmを測る。焼成は良好で堅い。

SK91 出土土器 (第24図、図版28)

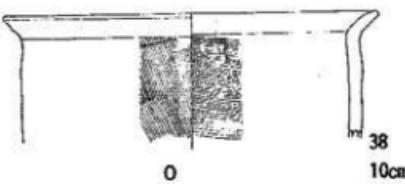
杯(39・40) 細にぶい黄橙色を呈し胎土に砂粒を混入するが焼成良好である。回転糸切りで、底径の口径比は0.39である。両面に黒斑が見られる。(細全面が一様ににぶい橙色を呈し、胎土焼成ともに良好である。回



36



37



38

0 10cm

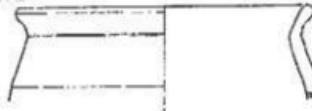
第23図 S×90出土土器実測図



39



40

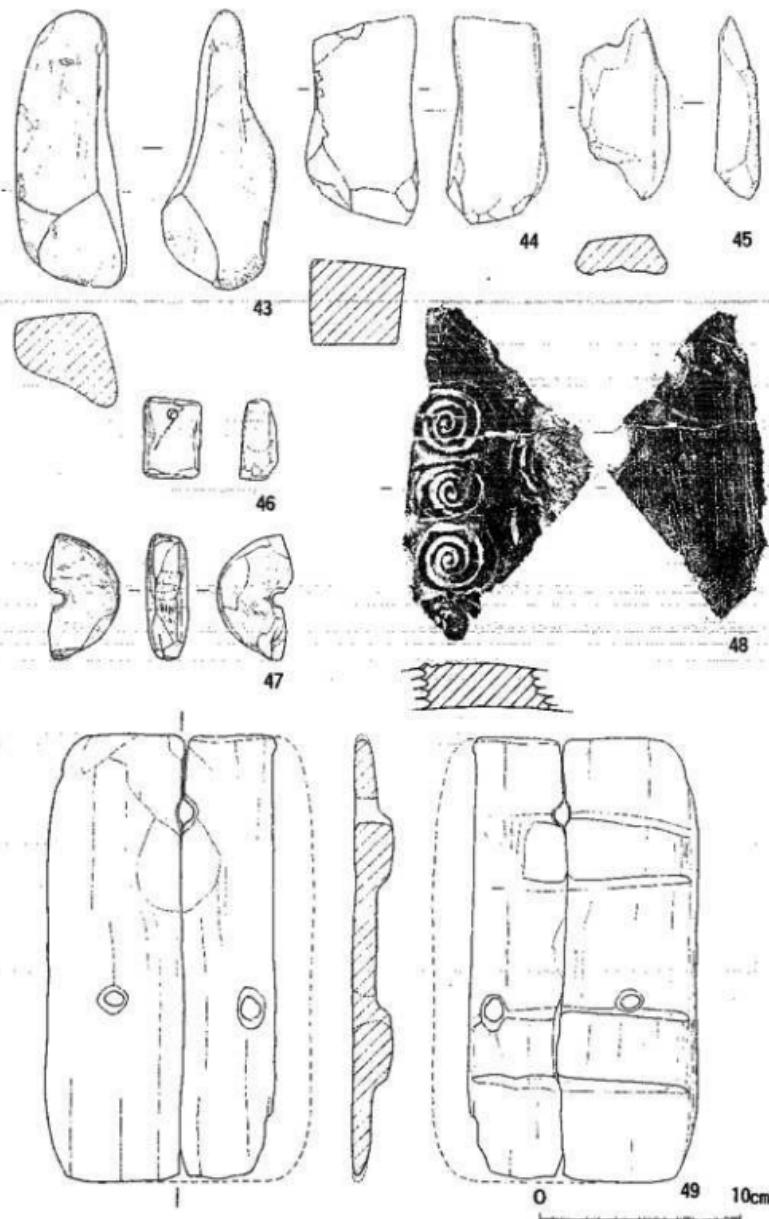


41



0 10cm

第24図 SK91出土土器実測図



第25図 砥石・紡錘車・瓦・下歯実測図

軸糸切りで、底径の口径比は0.35である。

甕 仰 淡黄澄ないし灰褐色を呈し、両面及び口縁部の断面に煤が付着している。内傾する体部から口縁部が外反し、屈折点は浅い沈線状を呈する。焼成は良好、クロ調整による。

甕 仰 灰白色を呈し、胎土に小石を混入するが、焼成は良好で堅い。口縁部に太い沈線が走り、煤は付着していない。クロ調整による。

S K92, S X93・94, S L95, S K97・98から土師器・須恵器が少量出土しているが、小破片のため、図示し得るものはない。

(3) その他の遺物

砥石 (第25図43~46、図版28)

時は長さ14cm、最大幅6cmで、二面に使用痕があり主に縦方向に走るが、中央部付近は横あるいは左上から右下に走る。石質は緑色凝灰質泥岩である。(43)は長さ10.5cm、幅5.5cmで四面が使用されている他、穂線の部分にも使用痕がある。石質は砂岩である。(44)は長さ9cm、幅4.5cm、厚さ2cmで、二面を使用している。石質は玻璃質石英安山岩である。(45)は上部中央に穿孔のある携帯用の砥石である。二面を使用しており、石質は緑色凝灰質泥岩である。

鍾紡車 (第25図47、図版28)

表裏は不定方向の擦痕が見られ、よく研磨されているが、外周は荒く削り取られており、平坦面が残っている。両面から穿孔され、孔径は中央部で8mmを測る。直径は6.5cm程と推定される。石質は緑色凝灰質泥岩である。

瓦 (第25図48、図版29)

平瓦が10点、丸瓦が1点出土している。いずれも小破片であるが、平瓦は内面に布目痕、外面に格子目叩き痕があり、丸瓦は内面に布目痕、外面は無文である。(46)の平瓦は灰色を呈し、外面に左回りの渦巻き叩き痕が、はっきりしたもので3個、他に明瞭でないが5個見られる。内面には布目痕がある。

下駄 (第25図49、図版29)

長さ22.5cm、横推定13.5cmを測る連衝下駄である。隅丸長方形を呈し、背部は使用によって磨滅、欠損している。前緒孔に接して、足裏によるとと思われる浅い凹みがみられる。

木簡 (図版29)

第12号 □□□――□

長さ13.1cm、幅2.1cm、厚さ0.55cm。両端が欠損している。第Ⅲ層出土。

第13号 [解] □□申請□□

長さ7.5cm、幅2.17cm、厚さ0.34cm。両端が欠損している。第Ⅳ層出土。

第14号 表 □□□□□□□□

裏 □□□□□□□□

長さ11.1cm、幅1.36cm、厚さ0.25cm。両端と右半分が欠損している。SK97出土。

(4) まとめ

第10次発掘調査では、土師器・内黒土師器・須恵器と砥石・紡錘車・瓦・下駄・木簡が出土地した。出土土器は、層序によって器種・製作技法等に若干の相違点が見られる。

まず、杯底部を見ると、1破片を1とした場合、層序ごとの杯全個体数に占める、土師器・内黒土師器・須恵器の数は表1のようになる。

杯底部の切り離し技法は、回転糸切りと回転ヘラ切りがあるが、技法の明確なものの量を見ると、表2のようになり、第Ⅳ層のみが、他に比して大きく異なる。

内黒土師器が層序ごとの土器総数に占める割合は、上層になるに従い漸次減少する傾向がある。(表3)

杯及び蓋で、回転ヘラケズリ、ヘラミザキ等の再調整のあるものは、第Ⅲ・Ⅳ層に多い(表4)。

造構別杯底部出土数、砥石・紡錘車・瓦・下駄の出土点数は、(表5)(表6)のとおりである。

表5 土器総数に占める内黒土師器出現率

層序	個体数	%
I	0	0
II	28	0.8
III	37	1.7
IV	16	2.1
計	40	3.1
	121	7.7

表3 杯底部の器種別出現率

層序	土師器		内黒土師器		須恵器		計	
	個体	(%)	個体	(%)	個体	(%)	個体	(%)
I	38	93	0	0	3	7	41	100
II	458	88	8	1	57	11	523	100
III	276	77	9	3	72	20	357	100
IV	63	62	3	3	36	35	102	100
計	917	75	33	3	274	22	1224	100

表4 杯底部切り離し技法別出現率

技法 順序	回転糸切り		回転ヘラ切り		計	
	個体	(%)	個体	(%)	個体	(%)
I	35	100	0	0	35	100
II	492	96	19	4	511	100
III	322	91	30	9	352	100
IV	96	90	11	10	107	100
計	1032	90	117	10	1149	100

表6 再調整のある土器数

層序	器種		計	
	杯	蓋	杯	蓋
I	0	0	0	0
II	1	0	1	0
III	2	0	2	0
IV	16	3	19	0
計	27	5	32	0

表7 遺構別杯底部出土数

遺構 番号	土器	内黒土器	須恵器	計
S X 90	69	2	6	77
S X 91	84	0	3	87
S X 92	4	0	1	5
S X 93	3	1	2	6
S X 94	0	0	0	0
S L 95	14	0	4	18
S X 96	0	0	0	0
S K 97	2	0	4	6
S K 98	1	0	6	7
計	177	3	26	206

表8 砂石・紡錘車・瓦・下駄・木簡出土数

遺物 種類番号	砂石	紡錘車	瓦	下駄	木簡
I					
II	2		1	1	
III	2		2		1
IV		1	4		1
S K 91			1		
S L 95			1		
S K 97					1
計	4	1	11	1	3

4 小 結

1 外郭南門から内郭正面に通ずる範囲には、道路およびS L 95の橋脚などとみられる遺構は確認できなかった。S A 99は、S L 95の南側しか発見できず、外郭南門跡（S B 57）の南北中軸線より西側に寄ることなど、橋脚として積極的に理解することができなかつた。

2 土壇はS K 91・92とS K 97・98のグループに分けられ、前者は第Ⅲ層期、後者は第Ⅳ層期の遺構である。また、S X 93・94は、第7次発掘調査のS K 64と距離も近く、位置・規格の不統一・埋土・深さなどから同種の遺構と思われる。第Ⅲ層期であろう。第4・5号木簡を発見したS K 60も第Ⅲ層期に伴うらしい。これが確実だとすれば、第Ⅲ層期は木簡年紀から9世紀中葉とされるから、第Ⅳ層期はそれ以前ということになる。出土土器および第14号木簡の年代を推測する手がかりが得られたことになる。出土土器については、整理を完了していないのでその概要を中間報告とした。

土壇の発掘例はまだ乏しいが、遺構内出土資料からその性格が理解できないだろうか。S K 91からは、植物遺体・炭化物層があり、土器量も多い。S K 97からは、植物遺体・炭化物・木簡（焼けていない）・土器が出土している。土壇内出土土器のうちS K 91・97・98から内黒土器、S K 91・92・97・98から須恵器が少量出土しているほかはすべて土器である。土壇は日常生活に使用されたモノの廃棄の場であり、火の使用もおこなわれていた。火の使用は、廃棄物の焼却にかぎらず、土器生産の場の可能性もあると考えている。

VI 成果と課題

1 第9次発掘調査

払田柵跡の内郭線構造については、第2・3・9次発掘調査により、実態がほぼ究明されたといえる。しかし内郭線の位置については、北側の一部が確定したが、南側については、第3次発掘調査の個地点しかわかつてない。長森丘陵南側の東西に走る道路は拡幅舗装工事が予定されているので、事前の予備調査が急務となってきた。

第9次発掘調査と既往の調査の成果と課題を要約すると次のようになる。

1 第2次発掘調査では、内郭北門跡と角材列は2時期の建て替えがあった。この再建は位置を南側に移していた。第9次発掘調査では、角材列と築地が連続した施設であることが確認された。角材列は南側に建て替えがあり、築地は崩壊後その中心線が構列の基礎として再利用されていた。これらの事実から考へて、この重複する2時期の仕事は、内郭線全体の大がかりな工事であったことを裏づけている。

2 角材列が築地の中心と接続していたことは、両者が同時に存在したことである。この事実は、角材列が内・外を区画し、視覚的に地上表現された物体としても、同様な機能を果すうる施設だったことになる。いいかえれば、角材列は築地にかわりうる施設であるということになる。角材列と築地という施設構造の相違は、基礎地盤が泥炭地と丘陵地という質的差異によるという理解に一面の妥当性があると考える。

3 角材列と築地の高さが同一か否かが問題となる。築地の高さは、基底幅3mとしてどの位になるのだろうか。延喜式の数式をそのまま使用できないにしても、約5~6mと想定されよう。従って、角材列の高さも築地と同じ高さだとすれば、おのずと決まる。この結論はさらに検討してみたい。

4 第9次発掘調査では、角材底面に礎板・礎石があった。第2次発掘調査ではみつかっていない。また、角材がわずかに前後左右に傾斜しているとはいって、底部から大きく傾斜しあきらかに倒壊したような状態は観察できなかった。この状態は、第2次・第9次発掘調査の観察結果が一致した。(注1)

2 第10次発掘調査

外郭南門北側の第10次発掘調査の概要を要約すると次のようになる。

- 1 外郭南門から内郭へ通ずる正面と思われる範囲には、道路・橋脚などの遺構はなかった。
- 2 土壇および出土遺物は、南北基準線より西側に多い。
- 3 土壇からは、木簡・土器など出土遺物が多い。土壇群が遺跡解明の手がかりを与えてくれそうである。

4 上記1~3の状況から、例えば木簡を作成・廃棄する機能を有するが、調査区の近入にあるのではなかろうか。第7・10次発掘調査区の西側あるいは外郭南門跡の東側を維持して発掘する必要が出てきた。

5 土器の出土量は、第Ⅳ層では須恵器が多いが、第Ⅲ層以上ではだいに土師器の量比が大きくなる傾向にある。(注2)

注1 工藤雅樹 1973:「東北古代史と城柵」 日本史研究第136号 (昭和48年)

注2 宮城県多賀城跡調査研究所 1973:「多賀城跡第15次発掘調査 考察」 多賀城一昭和47年度

発掘調査概報—宮城県多賀城跡調査研究所年報1972 (昭和48年)

小松正夫 1976:「昭和50年度秋田城跡発掘調査概報、考察 (3)出土土器について」 昭和50年

度秋田城跡発掘調査概報 秋田市教育委員会 (昭和51年)

VII 調査成果の普及と関連活動

1 現地説明会の開催

昭和51年8月28日

第9次発掘調査について

船木義勝、島山憲司

2 路団体主催講演会等への協力

月 日	会 の 名 称	題 目	講 師	主 催 者
5. 26	研修会	払田柵の現状	船木義勝	県南社会教育主事協議会
6. 2	研究会	払田柵の発掘調査	船木義勝	大曲農業高校園・社教科研究会
6. 24	羽後町成人講座	払田柵の現況	船木義勝	羽後町中央公民館
7. 29	拓本講習会	拓本のとりかた	島山憲司	秋田県教職員関係職員互助会
7. 31	拓本講習会	拓本のとりかた	船木義勝 小玉 準	秋田県教職員関係職員互助会
8. 3	子ども会リーダー講習会	払田柵について	船木義勝	仙北町教育委員会
8. 4	拓本講習会	拓本のとりかた	船木義勝	秋田県教職員関係職員互助会
8. 9	研究会	払田柵の発掘調査	船木義勝	横手・平鹿郡社会科研究協議会
8. 19	野外研修 (フィールド・ワーク)	払田柵跡の発掘調査	船木義勝	秋田県教職員関係職員互助会
9. 28	研究会	払田柵跡の発掘調査	船木義勝	県南高校社会科研究会
10. 13	全県幼稚園長会議	払田柵跡の発掘調査	船木義勝	仙北町立北幼稚園
11. 22	管外研修会	払田柵について	船木義勝	西目町文化財保護協会
12. 3	払田柵跡発掘調査講演会	払田柵について	島山憲司	千畠村公民館
3. 5	月例会	払田柵の歴史	船木義勝	金堀部落老人クラブ
3. 26	ふるさとの歴史と文化	語りはじめた 不文の遺跡	船木義勝	大曲青年会議所

3 発掘調査への協力

(1) 大湯環状列石

① 所在地 秋田県鹿角市大湯

- ② 期　日　昭和51年9月27日～10月5日
 ③ 調査主体　鹿角市教育委員会
 ④ 協力所員　船木義勝、島山憲司、小玉雄

4 第3回東北古代城柵・官衛遺跡発掘担当者会議の開催

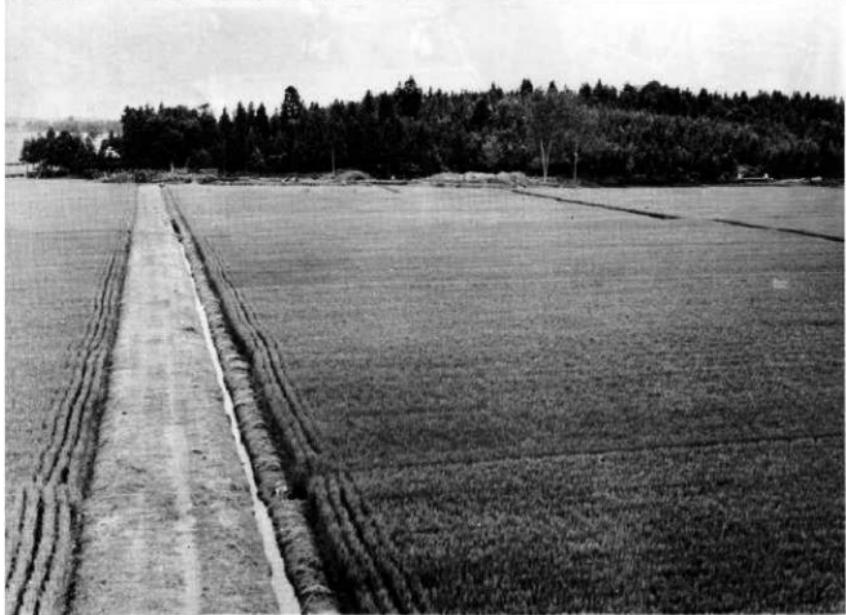
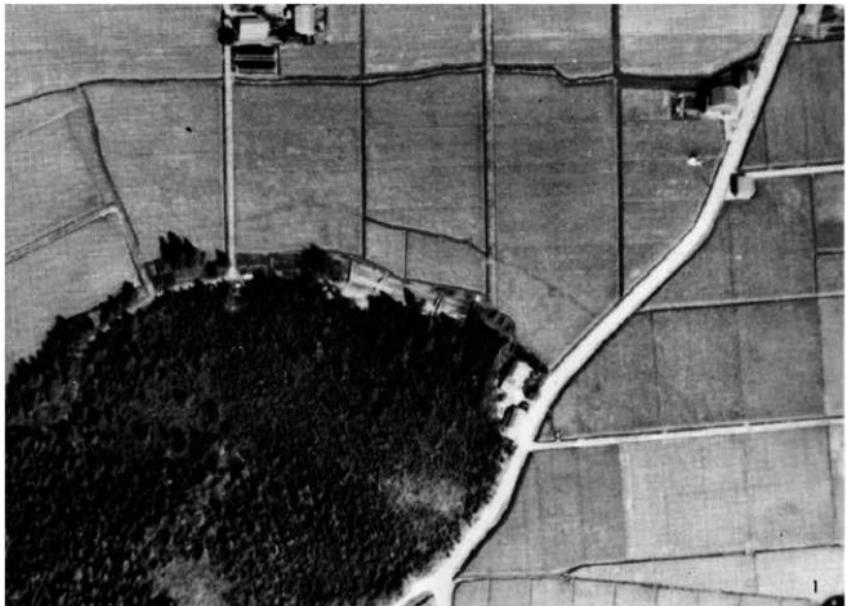
①	日　時	昭和51年8月30, 31日
②	場　所	秋田県弘田橋跡調査事務所
③	協議議題	(1) 築地の構築と構造 (2) 行政上の諸問題
④	出　席	秋田市教育委員会　石鄉岡誠一・日野久 岩手県教育委員会　国生　尚 水沢市教育委員会　伊藤博幸・新田　賢 宮城県多賀城跡調査研究所　桑原滋郎・鍛田俊昭

5 昭和51年度顧問会議の開催

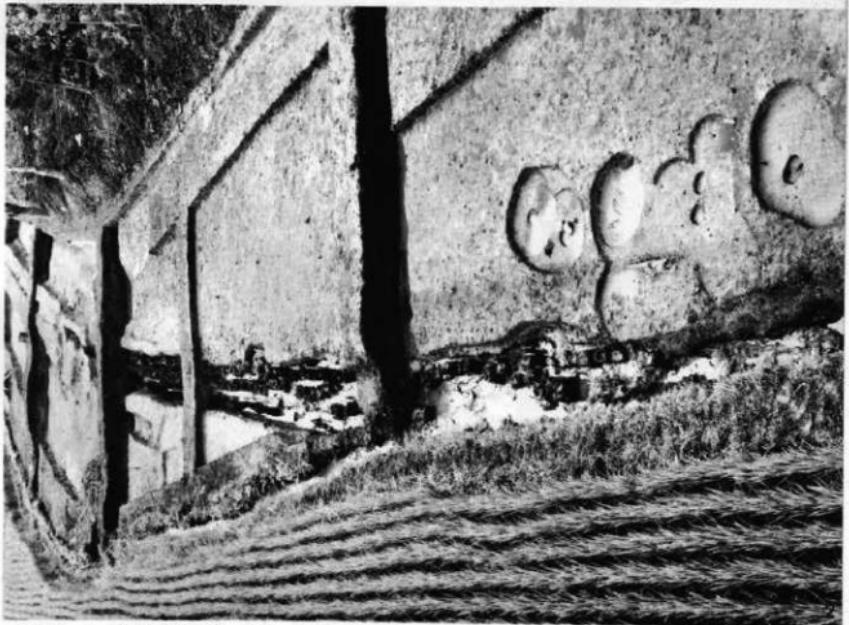
- ① 第6回顧問会議　昭和51年7月5, 6日
 ② 第7回顧問会議　昭和51年8月24, 25日
 ③ 第8回顧問会議　昭和51年11月29, 30日



図版1 払田構跡 航空写真



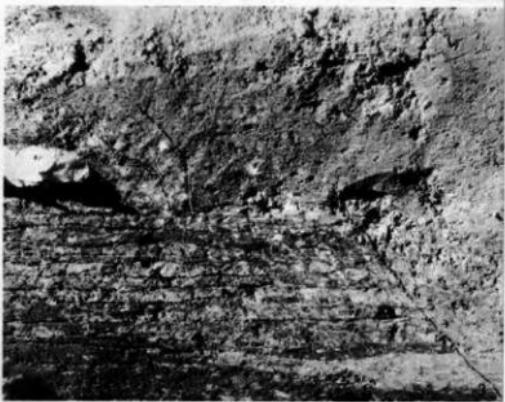
図版2 1 発掘地点の航空写真 2 発掘地点の遠景 (北▶南)



図版3. 1 第9次発掘調査 全景 (東▶西) 2 同 = (西▶東)

圖版4 SF75號地 (西▶東)





图版 5 1 墓地所见状况 (东→西)

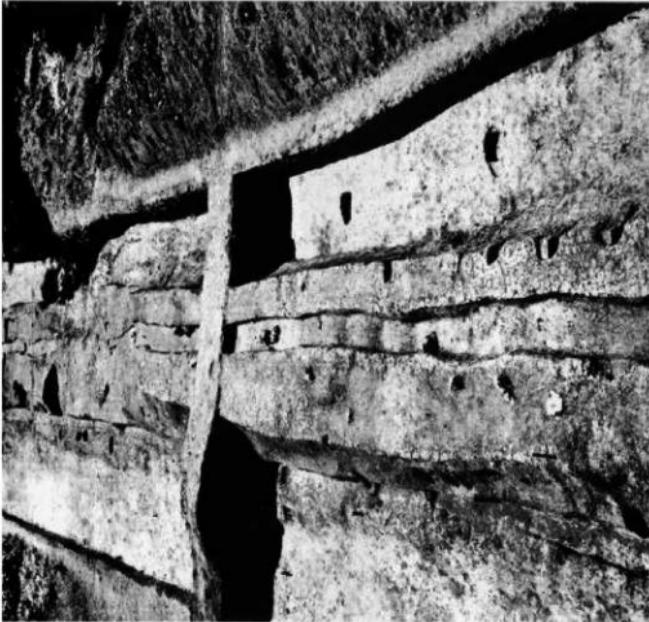
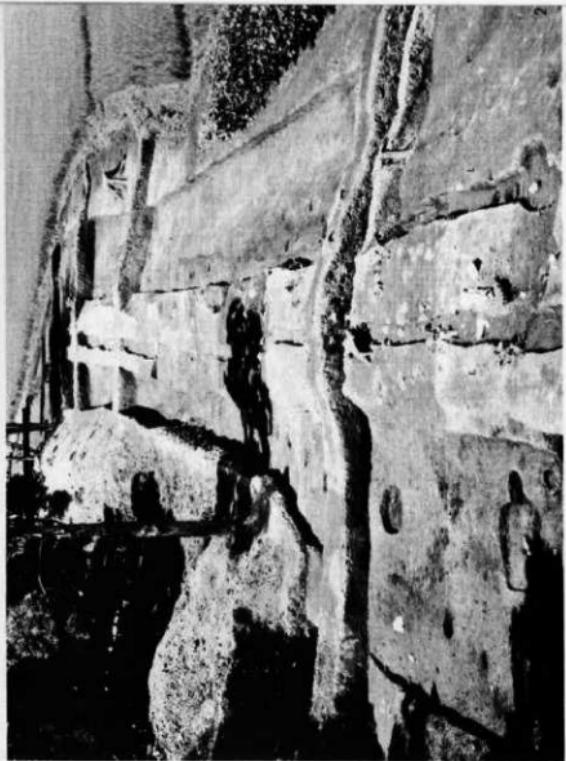
2 同 (南侧西壁)

3 同 (北侧西壁)

図版6 1 SF75錠手の遠い 断面 (北▶南) 2 同 平面 (北▶南)



图版7 1 SD76·SD77现状墙 (西→东) 2 同 (东→西)





图版 8 1 SD77-76 洋状礁带断面 (东►面) 2 SD77 洋状礁带柱状节理 (调查区东端部)

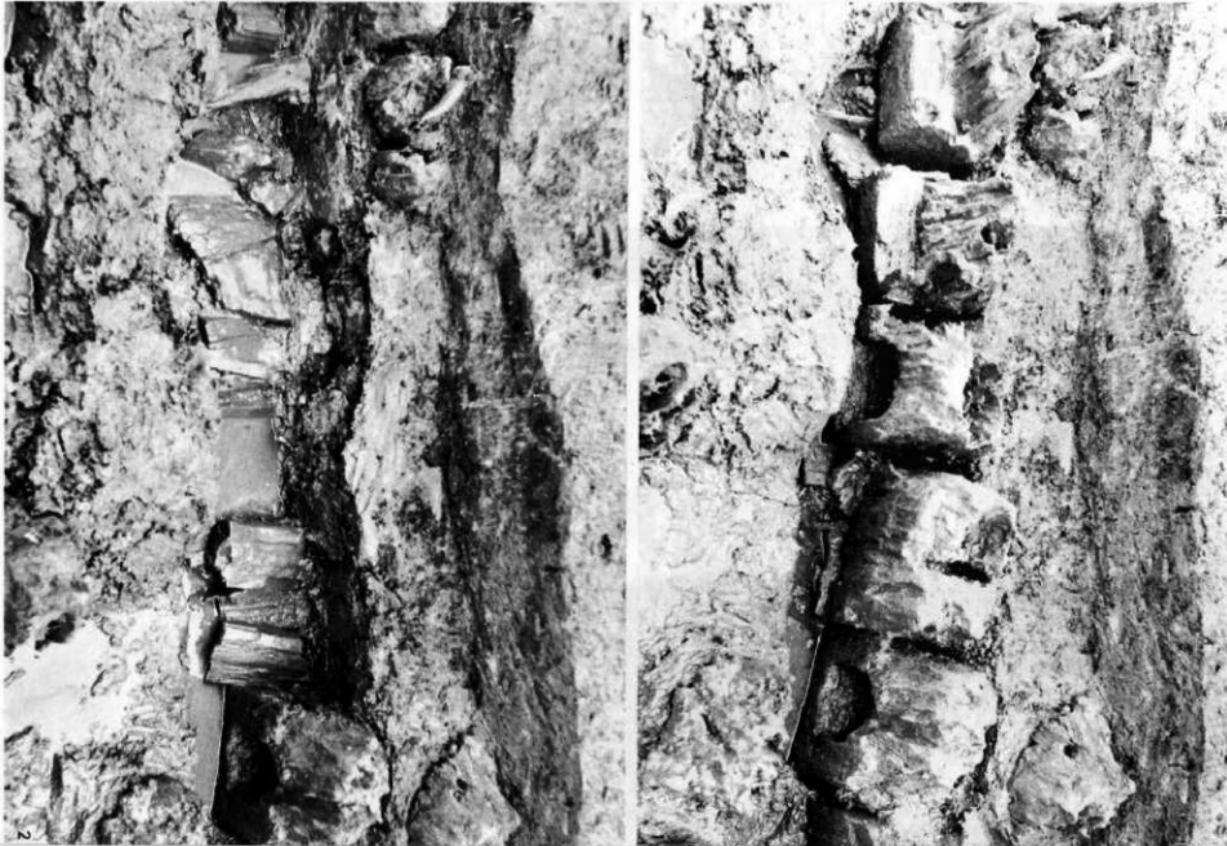


图版9 S A83·S A82 角材列（西→东）



圖版10 1 SA82A・B・C 角材列 (東▶西) 2 SA83, 82 角材列 (南▶北)

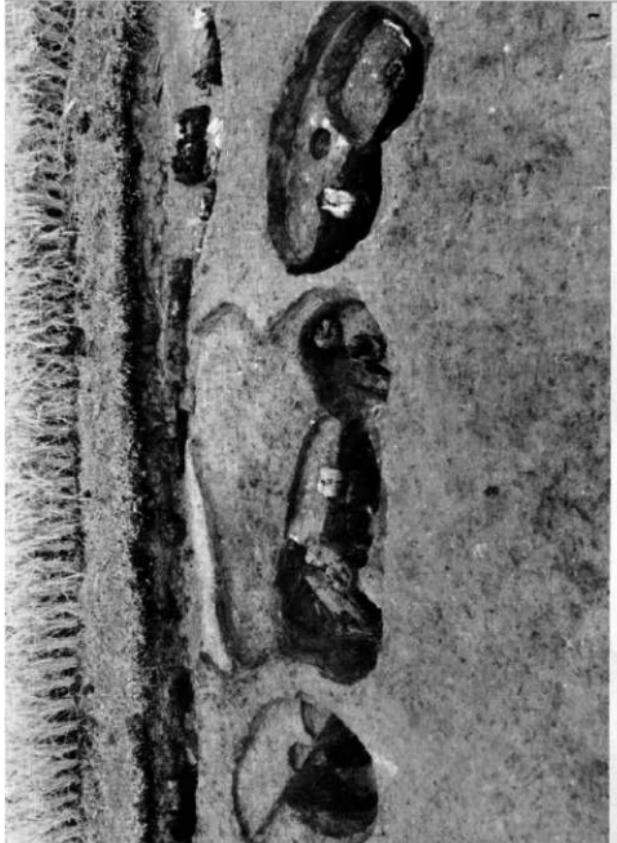
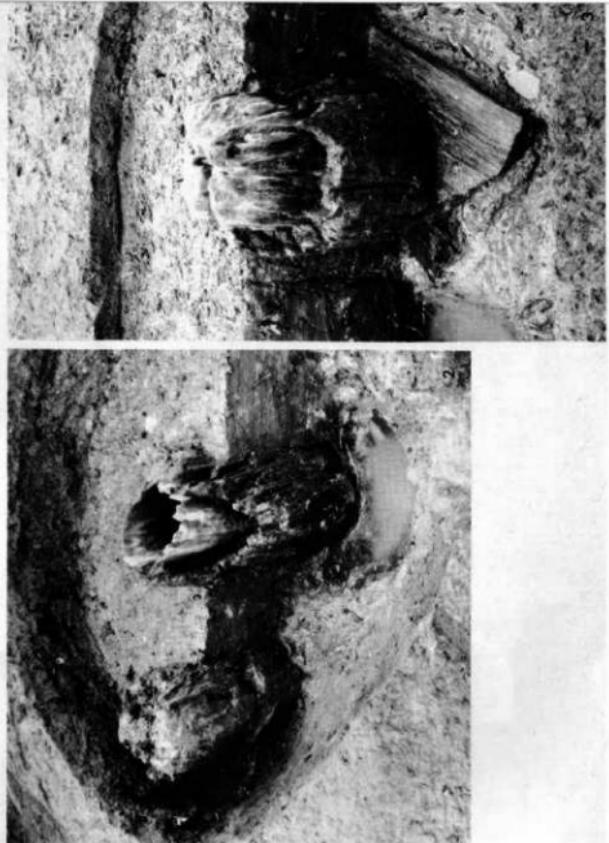
圖版1 1.2 SAR2A 褶板狀況 (北►南)





図版12 1 S A82A 瓦板状況 (東▶西) 2 角材列横断面 (西▶東)

圖版13 1 SB87A·B·C (南▶北)
2 SB87B—2·C—2 (西▶東) 3 SB87A—2 (南▶北)

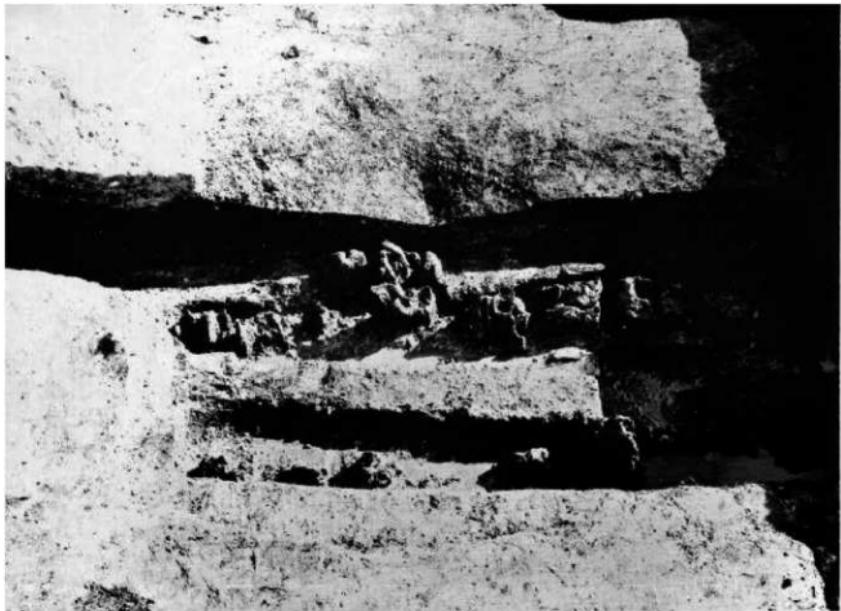




圖版14 1 SB80・79, SA84・85 (西▶東) 2 同 (東▶西)

図版15 1 SA84—2・SA85—2 摺り方断面 (東▶西) 2 SF75, SA83・82の接点 (東▶西)





図版16 1 SF75, SA83・82の接点 (北▶南) 2 同 (SD77内南壁 . 北▶南)



1



2



3



4



5



6



7



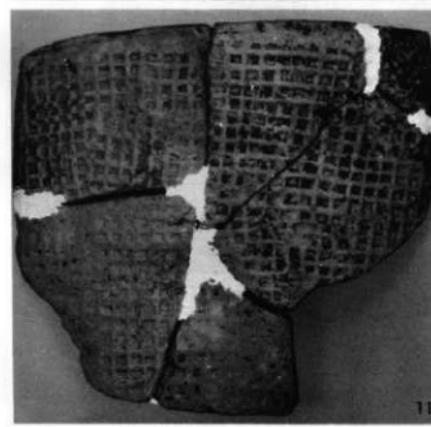
8



9



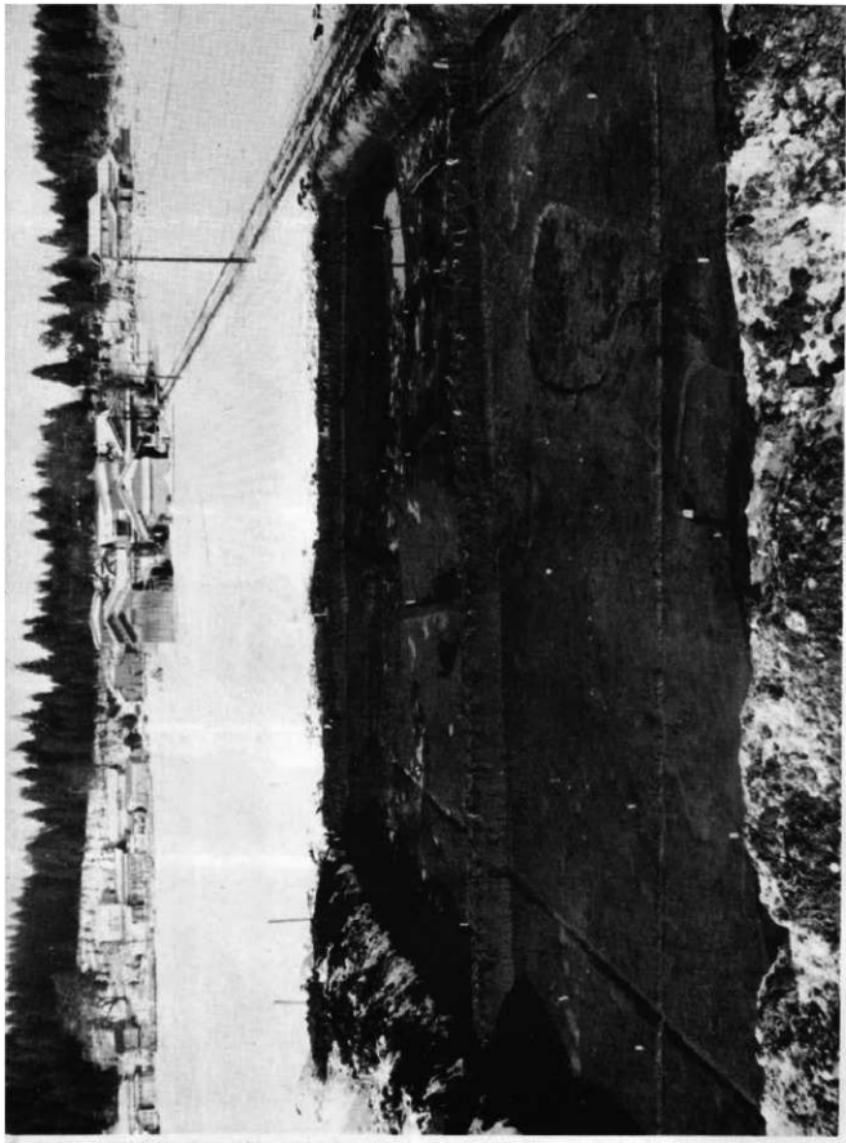
10



11



図版17 第9次発掘調査出土土器・瓦

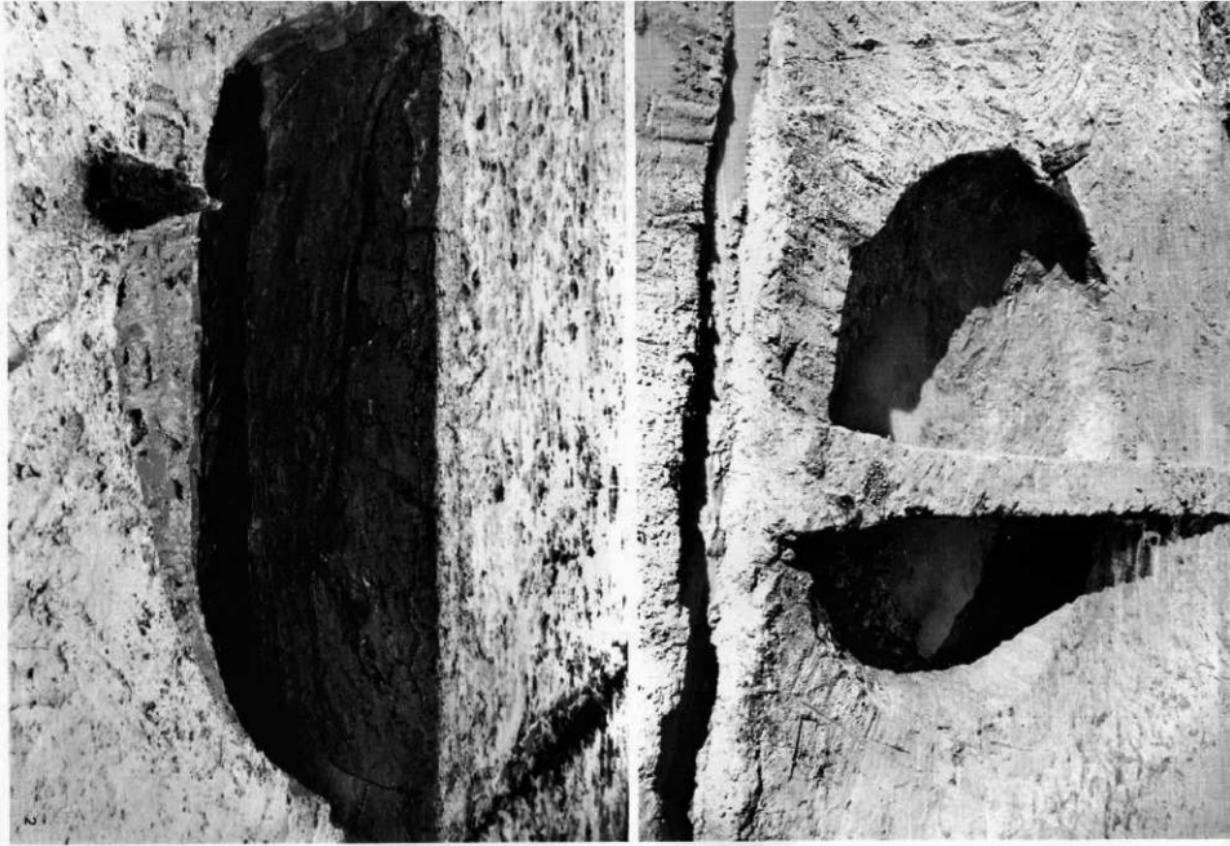


図版18 第10次発掘調査 全景 (南▶北)

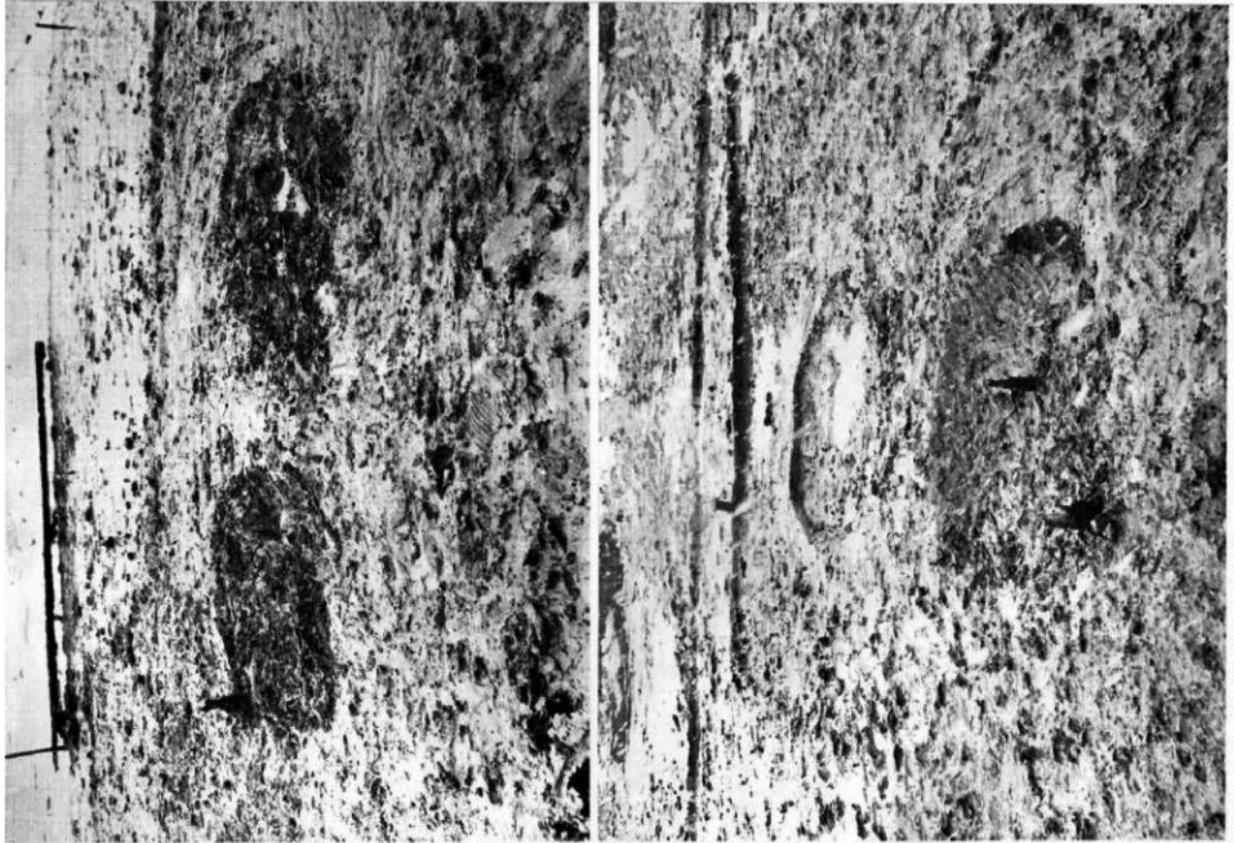


図版19 1 SX93, SX94 造景 (西→東) 2 SK91, SL95 造景 (西→東)

图版20 1 SK91 土块 (南►北) 2 SK91 土块断面 (西►东)



図版21 1 SK97・98 土壌 (西▶東) 2 SK97・98 (北▶南)

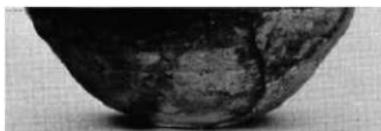




图版22 1 花瓶 出土状况 2 平瓦 出土状况

图版23 1 第12号木简 出土状况 2 SK 98内第14号木简 出土状况





1



4



2



3



6



7



9



5



8

図版24 第II層出土土器



10



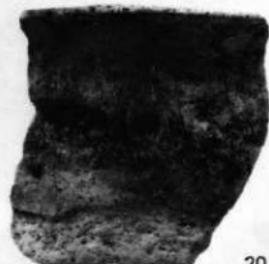
11



12



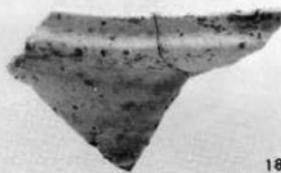
13



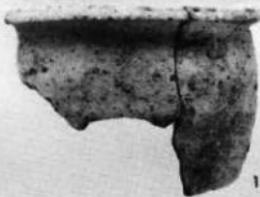
14



15



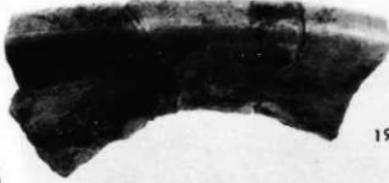
16



17



18



图版25 第II 层出土土器



21



30



22



31



25



26



27



29



28

圖版26 第III・IV層出土土器



33



34



35



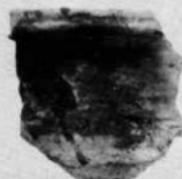
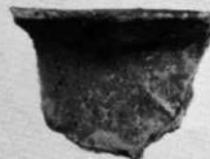
36



37



38



图版27 第IV层·S X 90出土土器



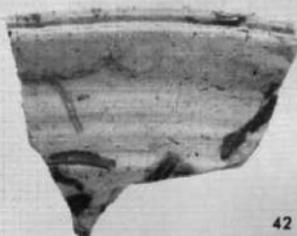
39



40



41



42



43



44



45



46

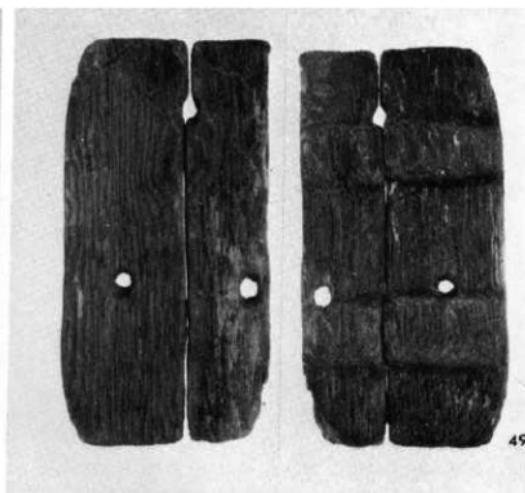


47

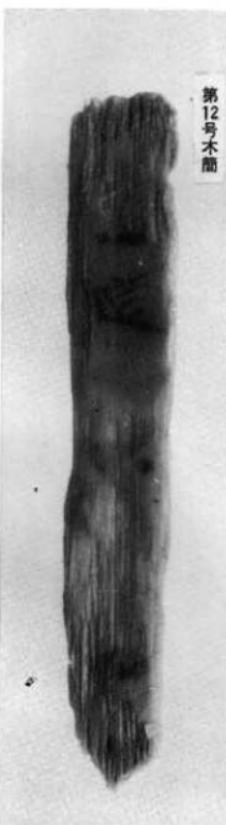
圖版28 SK91出土土器·砾石·纺錘車



48



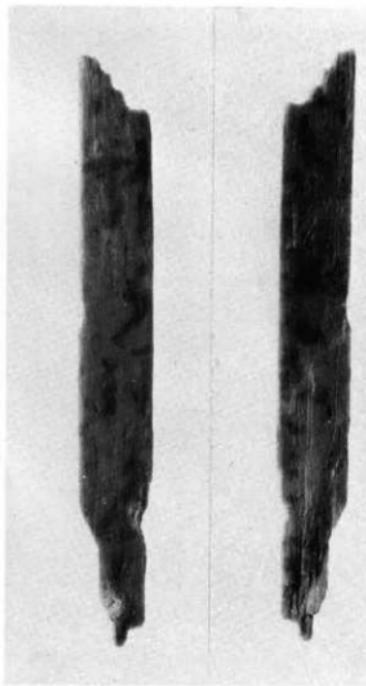
49



第12号木簡



第13号木簡



第14号木簡 表(左)裏(右)

大 実

图版29 瓦·下社·木简

払田柵跡調査事務所要項

1. 組織規定

秋田県教育委員会行政組織規則

第6条（地方機関の設置）

名 称	位 置
払田柵跡調査事務所	仙北郡仙北町

第7条 文化課の所掌事務は、次のとおりとする。

8 扟田柵跡調査事務所に関すること。

第8条 第2項

払田柵跡調査事務所の所掌事務は、次のとおりとする。

1 史跡払田柵跡の発掘およびこれに伴う出土品の調査研究に関すること。

2. 職 員

(昭和52年3月現在)

職	氏 名	備 考
所 長	高 橋 司	文化課長 兼務
主任学芸主事	門 喬 光 夫	文化課 兼務
学芸主事	中 谷 雅 昭	文化課 兼務
学芸上事	富 横 泰 時	県立博物館兼務
学芸上事	船 木 義 勝	
上 事	畠 山 憲 司	
上 事	藤 田 勉	文化課 兼務
嘱 托	富 横 利 八	
調査補佐員	小 玉 準	
調査員	小 松 昭 雄	
整理補助員	千 葵 静 代	

3. 顧 問

昭和51年度払田柵跡調査事務所の発掘・調査研究を適正に実施するため、顧問を委嘱した。

顧問 新野吉吉（秋田大学教育学部教授 古代史学）

顧問 氏家和典（宮城県多賀城跡調査研究所長 考古学）